

大治三年十二月上流起革



小物施設 十

大正十三年十二月一日 起革

○故羽吹英二所蔵の耶馬渓圖詩山陽と双陽井
：山陽が耶馬渓模写を以て當時雪義：山
状を易しく自慢を述べたる前に余が地図
耶馬渓と描影を収めんと予山有利助を乞ひ
し今も供つ多く來り一後す、耶馬渓圖ハ久
の心もえども而して雪義と山陽翁空山を觀るの圖
見し上鏡と一切と絶別と申仰と詩を詠す。うち
此年時代えどば未じ既せす紙ハ煤氣あるのみ
此里味あらず。吾唐紙多加石也。羽吹ハ雪義
住（う）寺と曰村のぬ（ぬ）あり自家より歸る珍



しつめ不出とつふと漸やく傍り出しある日の内に又即
にさう便し室事の山をこねて言ましめど。者
間三事との内一巻へ室事に興へてある三事他
の二事をき母へ此つどもと他へと並べてあるとのとあ
り、左にすこし書く所は母へ此つどもと他へと並べてあるとのとあ
りてあると見えぬ、一問を以て二日目の内
をゆくと時のことと聞し他の一問ハ自家の動
静と難解なるよもと歸る佑味を乞ふ。

山添じ芋ハ宵甚ちニ御候ニテ
内比もひとね(トモ)トモ

十二行

事大
上弓
山れ
冷大
相
目

下弓内九月廿四日方々今秋ニ又
上弓・方比今の着方ともちとモシ
ナキ日也御用事多忙節残すてり降不
主内至多のあ冷ある日と免しと御三の
主病・あらそと上大唐院にて前一毛前
後こおをと一其比ハアハシ御こもろがちと
シ前も出未へハアハシ御こもろがちと
後との狀を差すて頂りき。

初音川仕掛と義徳と一と不謹ゆ御る
大考方とも約月日は元セ未の夏月有し
此中秋十日利子寺川もとレツ奈サニ
生立ヒテモうちも奉くゆ人着ハ十五音

之比の事多々ある。かくもくは在てよし入
心匠引為知、今ト一派同じ比方一もほ財系
事ひに古ト云う縁の私方、正規者
七ゆる矣、とてや詔にてち、其乃免也内
内一四廿日、於ち府學方、税とよて於
之もすまし無し、へもよりて林と生
じじお絹との并下役奉次とト、もん義次
予五代、恭じてありて何するをよ遠故
氣もあつて、さういき先々け道の床、
ウケて、自と、うそもつづき、かくもくと
詔と、とて、うそもつづき、サリニハ此毛カテラ
參じて、早くりす角せ生あく、得

二大半をヨーとおえ、船や米等、わざを
の様子、大橋生立前、し写古今、二トと
新じる、院山前生吉船とおや、あ
よヨキマンとらう、おもへ二ふと印
心船ヒシネ、先ねもひきをある、ナニハ
又、ひ帝は附石で、うさんとまを互
費もの、き手あちしが、何が長久と云
うて詔を、モ方ハ此方の家、八、九うま
モおつけて、お假、ヒリ、御象、い
東一義飯、一心の主、船、舟主の御者
大、ト、ナ、四、サ、ト、モ、ナ、ト、何が、ま、お、南
ら、お、令、三、北、方、ニ、モ、世、男、の、内、ニ

洋

僕の餓おひに何と有くも豈て至爾
上うみゆゆつあし先おなづこ
御幼まち未経る事無

七月廿六日

表

母上家
廿六日

うきあそ上芋とて聖麿の枝村に業
、伏上品と作成の者金やめりても
とあることを此處にシテ御座ふ
月乞の事ご公へかへて一の乳土ガラ

十二行

上ドリ。着のみの子生え乍り、花十
カラ少生けさり試てみれども、此
着に比ハナモレタニヤ一ふ是不
主者もしましくが
ア細々入へ度利着てれまじり 紙
「三種、向角を」と

85

近待く
内々
三行の
前後の

主事事ハ大内印ニ之ゆきれましと仰
ヨツアリ、トテ大内と大野入んと仰馬
鹿うそきの、セメテル家もハシマ
とも新御酒と酒もおもよし口のあ大
切レニテ朱漆うとハナオシムヨリセモ
仕方多く旅ねども不便ヒシニ升入をの
あらうよんハ翁拍子入、主よろしく
生りほこる紙、かえとあつて、こればかり
已状を上へと取下すと、あ門下すと、
狀列才年せよ、前には御子、御子仕奉五
竹、大内、花氣、氣味とあつて、どうくふ
あ左、よし、國へ、御酒、御酒、ア

在き腰
お入
て朱漆
二行の
前後の

タツシム、乃立アレキ、構ウ、ウギ
ミネ、セヨキ、トジ思ひ、ぬ病氣、アサ
ニシテ、オマツ、是即お、座落、シテ、有
益處、有、シテ、モ、病中、故、モ、セカヘ、ト
コラセ、ツ、無事、シテ、

は、セ、壽、シ、ト、ハ、テ、ア、シ、合、シ、ム、シ、ア、リ、
ナ、ツ、ク、セ、壽、ル、ト、シ、有、

シ針修、シハ、此、ノ、シ、有、、私、の、紫
一、之、車、三、シ、ハ、死、ト、ア、レ、、左、ハ、
卒、うと、仁、モ、ハ、改、シ、ト、シ、有、シ、十
年、位、シ、以、往、シ、針、シ、モ、ハ、ウ、つ、二、
ト、ア、レ、、シ、氣、モ、シ、ア、ツ、フ、ウ、左、

痛にやがてさうしてしまひは去年
の春の記あれとすア敷地でひのわ
方へ渡れりお傷へ一方火災の爲も主な
伏手の故山のかうとてもあや
のうちふの古酒五升を出しきてお
左、金葉どうしも出で候。トモテ
是の新酒院川と金葉多く此る上京
も年あるの度れとてゆゑを抱き

○此も山うね塙古一庵主桂子の筆也
みわ載作細考上京勧派、前編
是の古剣深く早速者、抱き

とおあ、ひまからくと
○そよ去國もす有出、とくに
とふねじとへる參詔持て、文詩
かよ全細考も參詔の失御松井の
色つともれ勧夫て井高ハソシ内
寄も生御おもむちに細考失御
三のものとて氣もとく細考失御
梨影す口付、俄え未々、わ重又云
アルナラマを方とて、て大万あ
きじあらん所す比屋の花の時毛髪の
行射さう、へづつたのと有出、
侍画志貴已残花、想酒乞ひ全

老矣、後復能記。含暎恨、音家
一吟又天涯。

と獨り吟

六書院のわざを全く新しくお見、おちぢ
速らに生、か勝じて上うそひにひ
てかくねあつア型し、え、死を喜、

三月廿四日 真

母上作
絶一卓の絶

えもし以下の書簡、全部書寫に與り、よしと一巻
不殆當しえる。此ち萬々耶馬近幅とせんあま義
珠御目見えり。か後ニ朝倉ニゆき、すと云ふ一画
最後のあとと餘くある耶馬洋國巻のことと聞
するが如く、幅を離る可くも、もうまう、山陽が自家
の画と人、座がもはうとテ紙角に以能く跡筆
れて、此一現と印せられと云ふ。遺稿があるハ報
知の傍従の為めとが、う。思えず柳くかたきこゑ
七首取し得らうと云々、段々が大泊毫毛刻全
其手写う所の字と微至る一失まで、代へ
之寝めん。漸やく初め持中も、うと云ふ宣う
微にちづきを宿す。海く、うと云ふを柳子が云ふ

めがききよあくせき。三間枯瘦をあす。耶馬渓の國
卷の後世頃の名高きものとさうほんれ。此等の之間
が埋没して山陽佛菴家の著者もとれど漏れんお
るハ寧ろ一高とす。今ハ北の多羅院全印の
虫簡口を抱葉。山陽の終に附錄とて次々と續す。
予國卷に薦せらるる珍重の最後の一間也。實
善の妻お宿が男子を看けたる方のお宿が父
ニ臥仰してゐる廟から小室集とふてゐるをい
かうし、双林寺の仰ててお宿をゆきを支拂を
え、さんと見え候き且つ笑ひ多く父執もまか
ねまうのうじいわすおやうし、他の簡中よりお宿
の令媛を報することある、を善き事令媛もす

下りて車都くのあらうへ上らでまへて又へまく。山
陽石さりよ東錫と傳す(レタモ)の少林とあり。大
有光云とある丈人の雪舟の法嗣か。法嗣のゆゑ
とぞ實子と思ひ。法嗣の法母をかゝるとある
推せらる。いまだ其の詳を悉するはあらず。也
本來ニ跡の文滿と詳かくよ筋りす丸。陶師の
朱毛化毛と記せらる。或ハ被持の陶祝の補修
よりよ後一考か。又。跡の毛と跡の毛と要
す。北勢山簡所。傍り多けり。多色。印を要す
。これ又。平。千字。元合。ちかくのぬめ。もとや
。雪舟のもの。竹。木。圓巻。備考。節。も。刻。も
。の。圓巻。も。刻。も。圓巻。の。も。火。と。焚。を。焚。を。焚。を。焚。

きもとをもあらぬあらえりておのれの
よも抱く且をこしの候崎の御事に私うえ計
つ草子ニ令ニ朱佐にてマルテスシヨリシ序
シテおもてす。春日守出は只今も守
も。かく三松虫とカドムラシと申候御
邊にてシ事。御松虫と云ひがさうじ
病弱ハ二十又三をあつゝとえをいつモサツト
ノロ多き也付按出、三十五又ニルぬにて
とうへく。

朝鮮をひけ、とえよ生来、て々あらと
有てそのゆえ、まともに大隊入出来ん
互ニと石浦不若うけんハ抗すと石浦
珠、お後に、そ珠、珠、お角界
もてやそのア賴と、おさと不見、又
古花も近り、ある安錫、東元と行あ
らるるおりやも石、一丸の約束に、
犯産く生出。

おき星ミヘ骨粉、一にて京の諸和も一統よ
ろしく、銀山未の日、月峯、私も都、
私也

言甚の爲えじえにほのまとも。粉力
セテ、因ニキラモ枝をえど比ハ御事
ハキシトはキ一ちうてとく。皆キミをあま
リや又新方、之大油也と云ひ考じ
集め、枝の下ろしをもアノカにてハセを合
ひ朱山^レ山P.^ウ二八八
計アキラ 枝ハ引つてあくべりし大乃
林^アあま方ハ上野^アかきこ^ア是モハナタ
サヌキモの3本^ア三P^ウ叶^アのとを石^アお
木^ア

市金闕
之
而
而
而

其役へて餘間もござりぬれども少第
之より之五月初に於利年猶仕中ち
徳の、如何、伊萬又之南と、義和
立直ひ、また黒アラシの、甚かばす
私情を、大約あり、どうぞ、云馬首、
事あらず。紙錦と、義と、〇七

「三月末、大河漆榜と出で、家山也榜
銘と入て暫侍、大河南家の家に、此山を
見て、そぞ、後段、相原から、左つて、
多子家、おとをじ、行、右、紙内、居、
方の、榜、左、背、成尾、左、手、ト、シ、

此ノ一ノ考を以て其考の如く云ひ乍ルケモ想
シテ御陰の如く其事と存セガア既に既
而、是高大改色松盡大付御ニテ。是
食上人レシ印鑑と存セ大矣。これ一上人之印
也。御氣へ未ヒ因羽御別御ノソキニ
是都先仰リシヨ

○研ハ比帝漆乾ヒ時年五又八月丁巳
改丁巳事。わたくし七十七年。○大正元年
左○一九〇九年。研松急渴陽上人其後未
雨、研ハ七十六年。

○ヤニ其生ハ保多。名。角。山。寶。地。
之義ハ東山河賓。引虎。其一個。雪。義。

誠。皓。宵。由。不。第。ニ。れ。あ。無。ラ。ヒ。見。ヘ。
未。相。不。寧。ハ。あ。ミ。シ。ヒ。シ。之。未。至。
ニ。シ。ニ。移。方。山。部。山。腰。大。ト。十。月。ニ。生。ニ。差。
未。ひ。考。無。然。為。然。山。行。大。ニ。山。游。空。ハ。レ
じ。お。處。之。之。也。と。見。し。無。レ。ハ。の。之。も。之。
音。行。此。ハ。大。石。上。人。有。渴。渴。御。主。行。代
支。ハ。本。尸。理。且。改。サ。マ。刻。文。之。也。

六月十日

梅天子打綻深寒輕妙壯游

之觀

寒

雪客與人相處

朱子先生と申す。春夜遊玄
生。先づ上方へ上京する所、
其の事に手てを付ける所が、
草書の名前である。

故後以寧遠間
大有^久七廟^之至^五
例^之以^如其^所欲^也

あらわす事あつてあらへるにあらむる
やうゆきのりや、附毛復官時より研
とかく近ノ木末とくとよの宿の大木
社説えんとえんとえんとえんとえんと
不生東私の研とモハ何方やもすづつて
スレバ佐時アノ研ハ何毛も嫁入
の後のうきのく
お舟のもよひ七方覺あ、おお
多タクの舟のもよひ七方覺あ、おお
こよひも紫あひ
あのはれあましとからはれてお
何をゆ上へとくが此表
おと石見の向波

のあをかへ。○時々上人東錦の省りに
ト考へて、何事大を乞ひとア入る。
了見は大いに喜んで、ア考へて、
ア車錦も然れど、何處から車錦が
でたり。○長生に付物金立ちつま
跡多从居らうお取引をとしまして、刻畫
血塗、唐突西施十ア、泣苦すありに清
待め哉。不思役能ちんの宣傳十
主ソツ入もすんひふもまの都。此方からも
今村吉郎が有島の奴との見限せにて、
高士しむ原ア酒也でたり。密刀印
ト考へて

九月廿三日

高士

十二行

雪算老人

書中萬萬云々。もし御家に左の割合ア
英一十四ニ御實處をもとてア考へて
二不子ア家主れど、此次れ出でて研
詠すとある。この花豆も可れん。ア
阿翁の釵一本と咸り、此中ア花研ハ不
足多キ事とぞ。左折するやうな研
モノニ一向其便にえま。カノをつてあるア研、ヨリ角々
ヨリカリベツ直スナト、云々。考へ得

の代わに又十二月研アトハ地石生也
比儀有則ナガ刀身アノ位ノ品モナキシ
ナム一太官人ナガ者ニ考究元モル
熟考爲主ニ拂え

如言其兄子成彊笑曰
如其弟也

正月の日は林寺山に登る。山中は未だ春の氣氛
しかれ多處が主にうしのぎの宿泊する所
の裏山の山中守山にかたを度して行ひ
云うて是も冬の味觀は从一肩、内大山而
て紀州の又んへえと事とやまき善い大
丈夫にうそ下手子の様りよもよもと
妝白身にまつと先生山にて馳走す
ちくわ山の新山あわからずの御山の事と
考えぬれども御住む所と云ふに先づ
お出でなむ事と云ふに先づ

立河宿空南軒 想

井手

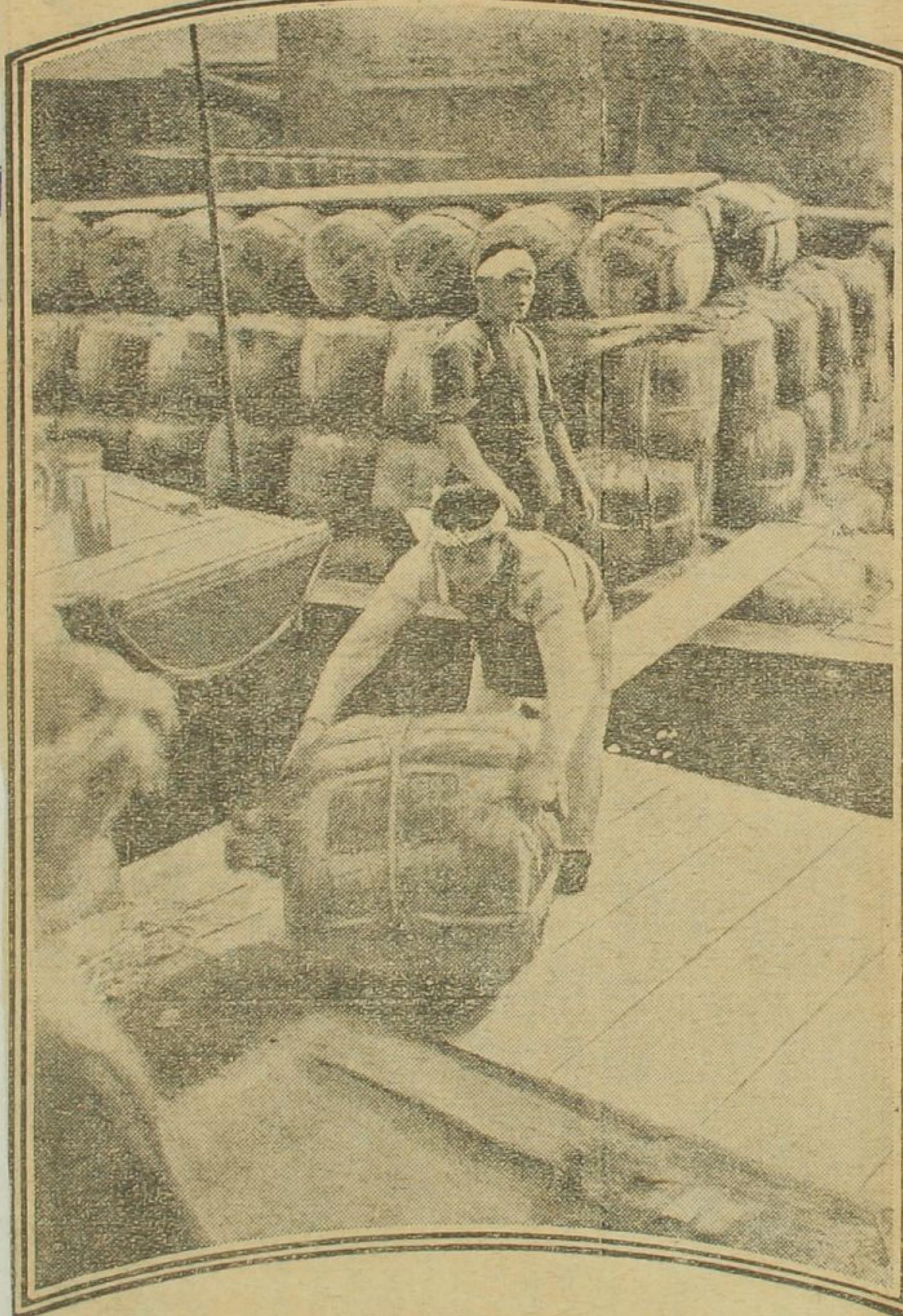
以上文亨了り、日將に没えりとて此而を思ふ、偶
ニタ利報氣の机、シニ日暮をうんべて業不果
氣も一そじ此の罪免ニ酒況ひとう抵ふの況々
を勧す、酒人の氣を強ふまることあり、一笑貲
の況々とこゝに收れ、山陽に歸國こうぞくをめぐる

眉

景情晚歲

(1) 越前も堀ぶかのり

景気がよければ賣れ、悪ければ悪い、でなほ賣れる。——酒は確に怪物である。大震災に鉄道の便
がない時でも、ナダのこもかぶりだけは救難船の中に満載され、そして隔れもせず、何より先に、す
らぐと配給された。失業、不景気、——どん底の社会不安におぼれられた今年の暮に、沙苗に着くこ
いかがは过去のレコードを破つて毎日、六七千タル、そして越前船の開幕筋へ——うれいではな
いか、船頭の辞令を懷にしたやうな洋服の男が堀ばたに立つて、威勢のいゝ「タルの動き」をなが
めてゐる。ほんの数分間だけは何もかも忘れて、禁酒國でないといふたゞ一つの有難さを味はつて
ゐる。



○文の偏に偏り文化紀念會漸やく開催の
日通の昨り宮内省とも御奉天聽に達し 楽
う金を千両御下賜の御沙汰と祥す、従つて貢
敬す故大臣疾の廟に報告と為す、辰在せり
バ宣めて喜んでるも、辰。左世中宮や玉曉
に思ひ有りしやう身を覺ゆるのみぞうしハ、文
政協会と類似の會もあること有んが、特ニ斯會
おれにてみゆか賜て主に御て參り玉けぬ内侍
可也や承り一かきも文化祭祥と紀
念する為の外人の切綱と願勧する故也云々を
特に嘉賞さうて御下賜お爲づけ也、場所故
年の努力薄々宣べれど北支那、浴一等以上

今後一層努力を要す

十一月三〇日

○山陽が疾ちて不眠を知り微卿と報し乍者兩々
相吹不持の間やうあり、今も随事山陽に其音高
とねめうえど、微卿と人を知らざりしが北人八輪
津の人こそ莫良平と云ひ又その山陽交
ふれし、尚絛より莫良平を莫山と莫三輪と
ち者姓多々かれて莫良平を莫山と莫三輪と
思ひの可やう。ああ木崎の家庭の山陽も、諸
候より、又同一手紙の内に善庵の事にて、北
人八輪井公顯家に子時角(称五印)と料
助とからい事いと云ふ。或は八輪井桜園と
混するものあるも桜園の者あつて之を食く

莫う、此の一件、泡あは山湯の附録に入りて
○後も元々才四助の如頃、浮世渡と作を起出つ
浮世渡り、天和四年、菱川の室の草書と成る。ぬるもの
二枚目、此源、浮世とのふいぬ毛の意味あり。元禄に先
だりて、風俗浮遊の極めたり。えあえ福前早
く、浮遊の日ちりとることを微すの。一枚料らず此
乙海布物の手織れの、傷むと出でても、高をとり本
り学とせ也。州之丞、十錦絹織と一頁、収め候。往
跡とぞとぞしの、市川因斎と圖。十錦絹織の、柄送の、石執
毛口こう微し得る所、價がく、三升、一棒と加
へり。紋注意すべし。味之丞、享保ある市村庄と
う傳へ鳥石清信と云ふ。

十二行

稀書複製會々報 第四期

第一回 大正十三年十一月

第四 第一回配布本解説

浮世續 廿二丁 一冊

(原本川越市)

本書は初丁表には序文、同裏より六丁表までは民間の婦女風俗、六丁裏より十一丁表までは遊女の常態、十一丁裏より十六丁表までは武家小姓の行状、十六丁裏より廿一丁表までは野郎の生活、廿一丁の裏面は跋文やうなる奥附より成れるものにして、當代の風俗世態を代表すべき人物を一丁毎に五七人づつ達筆にて描き、釐頭に説明を書き添へたる大形の繪本なり。奥附には『大和繪師菱川氏、天和四年正月吉日、板本鱗形屋三左衛門』とあり。筆者の名を判然とは署せざれども、一見紛ふかたもなき菱川師宣なり。天和三年版の『みなし栗』に寶井其角が

「山城の吉彌結びも松にこそ」と發句したるに服部嵐雪が「菱川やうの吾妻傳」と附け句せしに徵しても、當時師宣の名聲の既に満都を風靡し居りしを察すべし。而して本書は其翌四年(貞享元年と改元)の開版にして、彼の技藝の更に發達せりし四十餘歳の時の作品なれば、本會第三期に刊行せし天和二年版の『長歌古今集』よりは後るゝと一年のものなり。今兩書を對照するに、先づ描法に一段の進境見えて、巨匠が努力の跡炳然たり。すなはち本書は彼が傑作中の一に列すべきものなり。然るに傳本極めて稀にして其書名すら明かならざりしに、偶然にも内部に缺損も落丁もなき一本を發見したりしに拘はらず、惜い哉、題簽散佚して書名を知りがたし。但し各丁の折目の上部に『浮世續』の三字が刻しあるを以て、便宜上今この文字を本書の假稱とせり。

異うる比の一件 浮世絵山陽の附録と其の私記

然れどもこれは恐らく其書名にてはあらざるべし。浮世續とは『浮世繪』の誤寫ならんといふ説あり、又『浮世繪盡續編』の略記ならんといふ説もあり。共に臆説に過ぎず、幸ひに博雅の示教を得ば獨り本會の悦びのみならんや。

江戸の風俗は元祿に入つて急に淫靡に傾きしが如く言はるれど、按ふに其由つて來るところには更に遠因あるべし。何れの時代に於ても世相の著しく推移するは、一朝一夕の然らしむるものにあらず。俄に元祿期に入りて驕奢淫蕩の風潮が一世に渦き、民衆を遊惰放逸に流れしめしにはあらざるべし。むしろ泰平に馴れし餘りに武士の權威が次第に衰へ町人の勢力が追ひ／＼加はり、主客の顛倒を誘致しつゝありし際に、彼の天和元年の大改革の禍糸の弛みたる爲に、更に一層町人の跋扈を促せしに因るにあらざるか。畢竟元祿情調を味はんとすれば、元祿以前の江戸の風俗を尋究せざれば不可能なり。すなはち幕府が下せし天和の鐵砲以前を顧みざれば眞相を捉へ難し。然れども其材料を得ることは容易ならず。天

和以前の江戸風俗、殊に町人及び其以下に關する書は稀れなればなり。例へば戸田茂睡の『御當代記』などの如きものはあれども、そは一面を窺知する記録たるに止まり、江戸民間の風俗を解する料としては憾み多し。元祿以前の民間世相を觀察するに適當にして而も簡易なるは、不十分ながら、本書の如きを推稱すべき一種とすべし。畫面を書入と對照して迫懷すれば、元祿期の放縱奢侈の由來をも臆氣ながら捕捉し得る心地す。「浮世」といふ語が直に好色の意に通へり。本書名は其實『浮世繪盡し』にせよ、『浮世續』にもせよ、要するに繪畫本位にて取扱へる好色の義たることほゝ明かなるが如し。すなはち其收録へり。本書名は其實『浮世繪盡し』にせよ、『浮世續』にもせよ、要するに繪畫本位にて取扱へる好色としては民間の婦女、遊女の二種、男色としては

武家の小姓、野郎の二種とせり。その兩性中、白人を民間の婦女、武家小姓。賣色を遊女、野郎として對照し男色も女色も同一に扱ひ居れるが、此風習は享保以前まで行はれし時代の特徴なり。これらの事は本書に依りて明かに認識せらる。西鶴の浮世草紙などにてさへ到底見出す能はざる所なり。すなはち天和の改革前に元祿期のそれに匹敵すべき世相のあるを證明す。(未完)

竹之丞

五丁 一冊

(原本 東京
林若樹氏藏)

本書は芝居繪本中特種のものなれども題簽夙に散佚して書名不明なり。『寸錦雜綴』に三丁裏より四丁表へ瓦る見通しの一圖を轉載し「享保四年市村座、顏見世排戲畫牒」と題したれども、これ書名にはあらざるべし。各丁折目の上部に「竹之丞」の三字あるを以て暫く之を書名に假用したり。開版は内容等の關係より『寸錦雜綴』の享保四年説に該當すべく、書工も署名なれば、筆意より推究して鳥居清信な

らん。また竹之丞といへるは八代目にして當時の市村座々主なり。

本書は稀書として夙に重視され、『寸錦雜綴』にも引用せり。市川團藏と市川團十郎(柏筵)との間に確執を生じ、其紋章の三枚に一の字を劃するに至りたる演劇界の出來事を證明するを主とするものゝ如し同書の書入れにも「此比團藏柏筵ト確執ニオヨンデ紋ノミマスク消スココロニヤ一文字ヲ點ス、後和合一字太平記トイフ顏見世ニ柏筵ト同座シテ一文字ヲトリモトノ三升ニナリタリ云々」と記せり。この確執に就いては「俳優世々の接木」に據るに、團藏は正徳五年に不和を生じて紋所を改め、年々曾我五郎役にて大當りを取り、享保十六年の冬、十七年振にて中村座にて「萬國和合一字太平記」を共演し、三枚の一の字を除きて和睦したりとあり。按ふに、正徳五年は二代目團十郎が賣出しの血氣盛りなる廿六歳、それに市川總本家の看板の中に江戸の最負連を舞臺に集中せしに對して、一方の團藏はまた當年四十歳といふ分別盛りにして、技藝も圓熟し一門の重

異文、此の一半をあせりゆの火にへよ

鎮なりしかば、兩々對峙して相讓らず、十七年の長年月を睨み合ひに過したりしは事實なれども、尙是れのみにて本書の年代を斷定しがたければ、伊原青々園氏に質問せしに、左の如き回答を得たり。

享保四年の市村座顔見世狂言は外題も役割も不明なるも、翌五年正月は同座にて『釜鳴賀曾我』を出し、五郎（市川團藏）十郎（勝山又五郎）工藤（山中平九郎）とら（藤村半太夫）少將（中村竹三郎）禪師坊（市村竹之丞）等の役割にて役者の顔觸が繪本と符合する所を見れば、この繪本は享保四年の顔見世狂言たること確かなるべし、猶團藏の「暫」に扮し居るを以て顔見世たることを證せらる。

さすれば本書は享保四年の市村座顔見世狂言の繪本なることが明瞭なると同時に、これが開版もまた其當時なること殆ど疑ふべき餘地なし。

因みに、享保期の演劇を考ふるに、そは歌舞伎劇と竹本淨瑠璃劇との交叉點に在りしものゝ如し。此頃よりして殺伐危放なる武家事件を題材としたる後世の所謂時代物中に、當時の民衆が親しく囁目しつつあることを確かなるべし。

本書の題簽は本會同人三村竹清氏が既刊『野郎蟲』中の文字に據りて考案せられたるものにして、表紙は刊行の時代より推測して補製したり。

『浮世續』を複製する迄

本年九月末ごろ都下數種の新聞紙並に若干の地方新聞紙に次の如き記事が現はれました。

浮世繪の元祖菱川師宣作の『浮世づくし』といふ古本は稀代の珍本として帝國大學の圖書館に祕藏してあつたが、昨年の大震火災に焼失して了ひ最早永久に得られないものとして學者連は非常に悲観してゐた處矢代博士が川越市圖書館に該書のあるのを發見した博士はこの古本は全國に唯一冊しが無いものであるといふので坪内博士の古書珍本刊行會に報告した處同會では數日前川越に來り寫真を撮つて持ち歸つた、

つありし時世相を取入れんとする傾向を生じたり。こは既に寛文頃に其萌芽を顯はし居れり。淨瑠璃の脚色中に彼の金平式のそれを存しながら、別に世話式の妖艶なる情調を添如することに力めたりき。其一例としては本會第一期刊行の古淨瑠璃虎屋永閑の正本『仙人龍王威勢諍』などを見ても知るべし。而して元祿十六年巣林子の『曾根崎心中』が世に出でゝ後は、時代風俗の情味を取り入ることが演劇及び淨瑠璃の傾向となり、從來の如き武家事件を骨子とする武骨一遍の單調なる脚色は漸く廢れ、人情の機微に觸れんとする世話物的趣向の方歓迎されしが、而も尙ほ後の所謂時代物と世話物との區劃は判然せざりき。歌舞伎劇（時代物）と、民衆本位の竹本淨瑠璃劇（世話物）とは享保期に於て初めて握手し、後の所謂竹本淨瑠璃劇發生の端を發けり。

本書の狂言外題は不明なれども、翌年初春狂言にも歌舞伎の慣例を追つて曾我ものを取入れ居れり。

蓋し歌舞伎劇と淨瑠璃劇とが接觸せんとせし道程には、江戸歌舞伎の特色たりし荒事と、在來の愁歎場にて見ます。

記事のうち「浮世づくし」とあるは「浮世續」の誤、「矢代博士」とあるは「八代博士」の誤、「帝國大學圖書館」とあるのは「文學博士狩野亨吉氏」の誤、「古書珍本刊行會」とあるは「稀書複製會」の誤です。さて事實の方はどれだけ違ひますか。

去る大正七年本會創立の當時、目白臺に閑居された文學博士狩野亨吉先生が菱川師宣筆の珍本を愛藏してゐられると聞いて、ある日お訪ねしました。取出して示されたのは古色を帶びた一冊の大形繪本で表紙も附け替へらしく外題紙もなく、只折目の上部に「浮世續」とあるばかりでした。狩野博士は「此本は先年手に入れたのだが他所では一度も見た事がない。恐らくは開版後すぐ版木が焼けたのであらう。天下一本と稱してもよからうから、複製は望む所で

異文、此の一年もあせりゆの火をよこへ

鎮なりしかば、兩々對峙して相讓らず、十七年の長年月を睨み合ひに過したりしは事實なれども、尙はれのみにて本書の年代を斷定しがたければ、伊原青

あるが今は仔細あつて許すわけには行かない」と言はれました。博士が拒絕された理由は公刊を客まれたのではなくて某出版者に對して情恵を重んぜられた爲めであつたから、別本を發見するまで複製を断念しました。其後該本は巨額の價を以て某書肆の手へ渡り昨年の大火に焼失しました。焼失以前に某書肆は東京帝國大學附屬圖書館へ購入を乞ふ爲めに數日該本を預けておいた事もあるさうです。

川越圖書館に師宣筆の繪本がある事を私が初めて故八代國治氏（國史専門の文學博士）から聞いたのは四五年前ですが、それが『浮世續』とは想ひ寄らず念頭に深くは刻みませんでした。本會同人林若樹氏から聞いたのはつい今年の九月ですが、同氏が偶然該書を發見して川越圖書館の主任者に保管上の注意を促されたのは大正五年の秋ださうです。汽車の時刻に迫られて内容熟覽の暇を持たれなかつた林氏の記憶は八九年の星霜を経て一層臘氣ではあるが、其談話から推して考へると、狩野博士の秘藏本と同種のものらしく思はれたので、私は視力不自由の身

つありし時世相を取入れんとする傾向を生じたり。こは既に寛文頃に其萌芽を顯はし居れり。淨瑠璃の脚色中に波の金平式のそと手六くよふ、リニセラ

を顧ず、本會同人和田博士の紹介狀を携へて九月十八日に川越市へ出張しました。意外にも圖書館の安部司書は物故され、新任の齋藤氏は病氣引籠中、殊に目ざす繪本は山田年風氏の寄託本で今は市役所に保管してあるとの事に、意氣先づ一頓挫しました。幸に館員井口氏と川越中學の久保教諭の盡力に依つて武田市長に面會し、市長の斡旋に依つて即日所蔵者の快諾を受け、同廿日寫眞師を同行して約三時間に全部を撮影しました。片面づゝ寫すのですからカビネ判合計四十二枚になります、それを短時間に寫した爲めに多少不成績の點があつて後に複寫と彫刻に大分苦しみました。設備の行届いた寫眞師の寫場で寫してすら失敗を招く例もありますから、出張寫眞は大抵の場合に複製上非常に因難を感じます。出張撮影は乾板を用ひる外ありませんから便宜上一旦縮寫して、更にそれを湿板で複寫する時原寸に戻し、其膜を版本に貼り付けて彫刻します。斯様に手數を重ねる毎に幾分か變化を免れないから、彫師と摺師が原本を目に浸み込ませて居ると否とで大いに成績

ら、紙質が引締つて保存上最も有效と信じます。

（山田清作）

發行日について

毎月の發行日を廿八日と定めて奥附に記しておきます。併し木版本は活版本よりも遙に晴雨と溫度に關係をもつてゐますから、如何に準備に苦心しても多少遅速を免れません。一寸例を申せば、膠は溫度の高い時使ひづらく、本文は用紙に水分を含ませて刷るから雨天續きには製本に着手しかねます。又發行後迅速に番號を記入して東京市内は直ちに田口組遞送部へ渡しても、配達系統の都合や風雨の影響で同一區内でも數日前後する事があります。地方送りの分は包装に注意して書留郵便に託します。萬一途中汚損等の事がありますたら御通知を願ひます。

第三期第廿四回配本の特別に延引しましたのは稀書解説第三編が出来なかつたからです。前期と同様に時日を見込んで着手したのですが、紙数が豫算外に増加した爲めに、活版の進行が往年の如くでない

複製用紙について

山田氏の藏本は表紙の表面あらかた剥離して一隅だけに原色を留めてゐます。複製は其色に倣ひました。外題の文字は三村竹清氏の揮毫です。

狩野博士の舊藏本が失はれ山田氏の藏本が現はれただけに、一本東京に現存する事を確聞しましたが、閲覽の機會を得ません。故小林文七氏の遺愛品中の一本は世人に知られない内に焼失しました。

『浮世續』に用ひたのは埼玉縣産の細川です。原本の用紙に比べて纖維の荒い嫌ひはあります、他のあらゆる點に於て今日の美濃紙や大半紙に勝つてゐますから採用しました。『竹之丞』の用紙は、原本に近い粗造品の搜索に苦しんだ揚句に、大半紙を探り、少々地色に加工しました。表紙は二種とも表紙屋を煩さず、本文と同一の摺師阿部氏の手で拵へあげたものです。染料の外に十分膠を施してありますから褪色の懸念も少なく、材料は極めて薄く見えなが

鎮なりしかば、兩々對峙して相讓らす、十七年の長
年月を睨み合ひに過したりしは事實なれども、尙是
れのみにて本書の手代と所定のこゝりしと、ト

爲めに、活版所の製本部が和裝製本に不馴れであつ
た爲めに、遂に半月以上おくれる事になりました。
在來の會員諸君に對して深くお詫を申上ます。どう
ぞ是も震災の餘波と御見許しを願ひます。

次回刊行豫告

新編金瓶梅原稿 一冊

著者曲亭馬琴が挿繪も文字も自身で綿密に書いた
第七集と、眼病いよく進んで挿繪だけ搜り書きに
し、文字は亡息琴嶺の寡婦に口授して代筆させた第
九集とを收め、對照用として刊本の複寫をも添付し
ます。

九百年忌九重西木繪盡 一冊

著者曲亭馬琴が挿繪も文字も自身で綿密に書いた
第七集と、眼病いよく進んで挿繪だけ搜り書きに
し、文字は亡息琴嶺の寡婦に口授して代筆させた第
九集とを收め、對照用として刊本の複寫をも添付し
ます。

會員芳名 (其一)

東京 河竹繁俊	同 尾林勇
同 鳥居清忠	同 笹野堅
同 國學院大學圖書館	同 大村弘毅
同 車禮包夫	宇佐美薰次
同 高津百合藏	小平省三
同 内山且三	原田敬吾
神奈川 武内暖英	小杉徳
新潟 小林敏三	木村吉三郎
東京 堀眞人	梅岡源太郎
東京 松平讓	史料編纂掛
同 山根正介	森川治廣
同 思成堂	島山重憲
同 宮尾しげを	永井一徹
同 小林昌真	細木原青起
同 大河良一	岡本一平
同 喜多三郎	加藤
同 平澤喜兵衛	稻垣
同 岩本榮太郎	高畠
同 貢井安太郎	達郎
同 東茨城	木村吉三郎
同 同	梅岡源太郎
同 同	史料編纂掛
同 同	森川治廣
同 同	島山重憲
同 同	永井一徹
同 同	細木原青起
同 同	岡本一平
同 同	加藤
同 同	稻垣
同 同	高畠
同 同	達郎

(次回續載)

の聲を表すの後と少くれ車を市内に駆チアスレ停
止のもの二十数人あり、此の病氣の傳播を防ぐことを、直
北高に四條河原の、應終と氣を散て板を垂し、二
十萬人ハ益々監視の範圍に屬すと云ふ。併し、市
主、監視の不可能也、別と貪らぬまゝ、傷け出
きをあざすあたりこちらより移動するが多うある
故、病氣の移動判斷を先づんからず、其の監視
義務ハ今の方へ向ひ、行はれ難いと云ふ。
の主要な町へ復興せんは東京美術作業部が
夙夜のああゆをえつけ等行き覗き此段宣言
作家の作品を書を傍りえつけあり陳列し可い、
玉石混合せざる丈もも氣をよきかりし、但し震災

と田舎を免るに丸金走の筆幅を喰まつといふ事
多く、どことなく全奥きし國さまあらず、あらずやも
嘗現すへきものと云見えけり。たのれきハ食ひのあ
可

南宗の部

華山 眠猫鷺産

菊池も写す

木末

浅絳山お

山陽影船

漫幅

波多江承平

草木 蓮鷺 渡橋 十坂

山陰影船

波多江承平

玉生 雲山静此

神ノ名一

芸翁 書幅

口上

古画之部

梁楷 李白

松手互亮

乾山 花底

原市中也

布代 榆葉

口

上

应春 月夜の鳥

後田彦助

寢翁 寒山

原市中也印

寒山五六幅生てゐるの太湖石と書く。石上睡猫と題
してある。可笑し木末の山か一粒の風致あり。山陽
の景物とぞよし。そほほの筆は大抵うし竹のを
寫すもの極き。玉生の雲山寫す。印と大抵もと例
の濃墨と一粒の鳥味と寫す。古画の内布代の
梅疏は樹上ちく吹きの立つ風景を毫毛凡

梁楷の書李太白の詩也应秀の日本より
酒の葉手本も此の本も又入ります

の白家の紅鷺や、せ、録しておう。みと血つ味のちまき
家を思ひ出でます。其トビツク丈目ゆの類もあひて置
かうと思ひ立ち、冊と見え、家は、白鷺齋園書と號と
命し、初日は六十項を録し、年後追記附せばよいか
二十七則ありまじり追記録し、其内因縁ふ筋文も
行ひし血脚の時方つぶれ有せぬともいへどよ
うと思ふ、序つも自傳と書いてあるとこも了程前
試みに之もあつたが、之れが血脚の事じある、寧ろコニナ
地業化自らの傍らさう片山野芳が、間草
じあめの血味もあり、

十一月三日記

十二行

名家の賣（其九）
高野長英筆

後藤子爵家所藏（本文第八十四頁參照）

うと里へ宵々向處と書ひてお
試みにそよぎが、先づかぬ
所集は得の傍らまづく
見る事無かす。寧
方か
べ事の意味をもつて
十一月三日

十一月二

名家の寶（其九）
高野長英筆

後藤子爵家所藏
（本文第八十四）

先帝創業未半而中華崩殂今天下三分益州疲弊此誠危急存亡之秋也然侍衛之臣不懈於內志士之群遙顧於外當忠臣忘身孝子竭節反為忠善之官有司當知先帝在時每與臣談此寧未嘗不歎息痛惜於桓高也以爲陛下之軍無大患以小患以當之必欲保行陸和道援方舟所到則遠小人微深所以興亡也願陛下留心於此

A vertical calligraphy sample in cursive Japanese script (Shodo). The text is written in dark brown ink on a light-colored, slightly aged paper. The characters are fluid and expressive. To the right of the sample, a metric ruler is placed vertically, showing measurements from 2 to 7 cm. The number '20' is printed in red at the 2 cm mark. The word 'JAPAN' is printed in small red capital letters near the bottom of the ruler.

卷之三

元

卷之三

卷之三

卷之五十一

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9

JAPAN

Tsuru

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

後藤子奇：花でなくせむも美の細字大陽も見る
居候院ち所代に手に入れたるを、一陽のゆきれの前
後出の表ある身の所持志舞文公の友人四翁と教お
ぬりよ念入りのよし也、定め不見　十二月三〇録
○先日手入本角宿院にとて一夜寐るに
薄ふ、月に北緯湖行の捕・ねか役の材料より
もううよ多く計らひたのか活王源（くわうのう）
や西鷦の若と傳ふんと祐と極かに、もくわや、極陰
にと題し、堂陰にとくの支那のとて擬
くやあん、各が故に機慧のよし、言の怪
るもん、室本侯主の捕ね張は後古　十二月三〇記
て見て第十一のううしが地もと材料をえりおると池

十二行

四大伍ハラフ

○東洋文庫の手記録（日本）北の文庫の所記
崎六郎男：寧子の分譲も、おら國の萬の支出し
する金の半千萬以上といふ、建築費も四千萬円
を要し、他に畠田雪村（維ゆき）の支りを引受け
て元も支りて、金も十二年（昭和）八月、支えの前高
石エイ翁の外うそとあらず、今が財固法
針立出たるわれある、但し此の財固法（ヨリ
維持費）と二る費用を出し、莫利ナシを後
り非ずる荒とし。

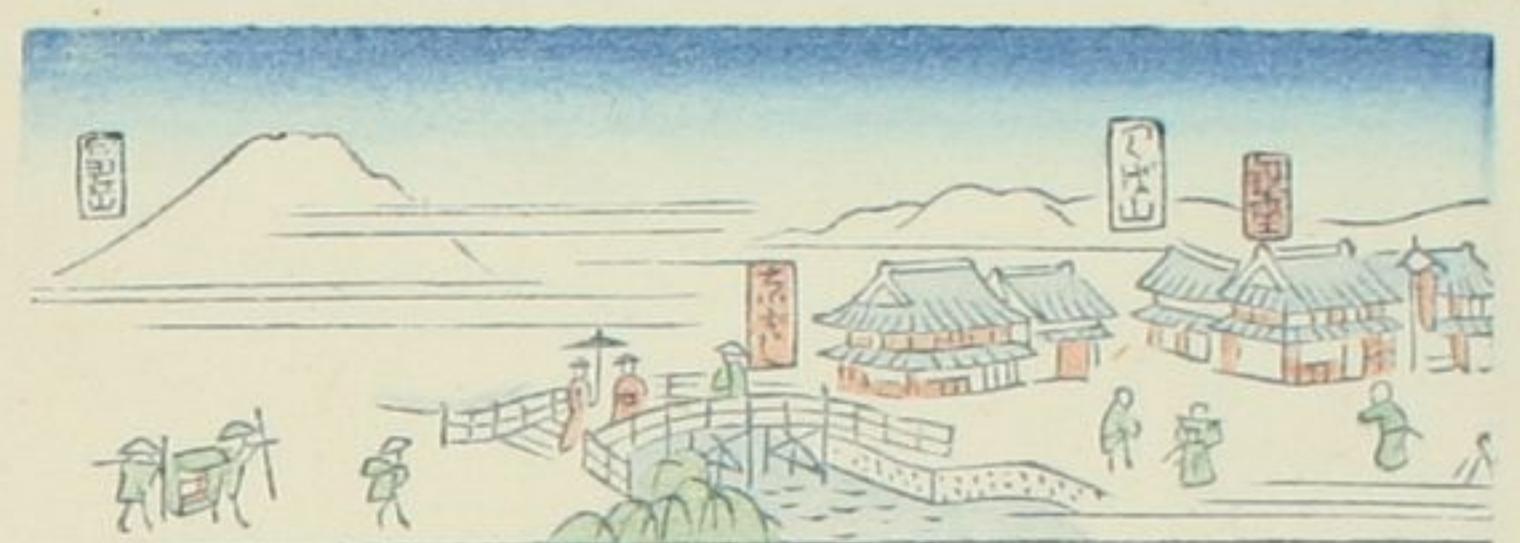
○昨夜数果中神田の書店に明治以後の革
（元）

記二十九年
固、菊左全盛時代の評判記は清劉丈上老室の
材料、未だ至る所得易いもあらず、
固有缺焉、傷は重くへきもの多くある。而して
自合の架すこゝとて、自合の餘り生る
に馴味をみても、此般の評判記は、始めて
實用する、久張的以降以前の評判記の式敵
之横幅形えども、幅の狭い所と洋紙流傳
あり、仕し各冊で形も幅の後者似顔の代も
あり、いつれも汚損する。始し
北評判記は、既往十年（如す）既往十九年（如
る前初の一章）洋紙：折りさんど、浪考もし

十二月四日記

和紙：改まらず、象の皮、圓肉の事。
十五年（如す）譚西洋剣、也、既往十
二年七月廿九日、市川固一郎、牛四郎宗
十郎、や國次、等出演、其のハナカラ風潮
見るべく、差あう文化祭に出席すべくある
也。

評者、六二連、收え、海壽堂也、儀名
及道のスの處セ、觀セラ
當第廿五章、是機縫の西洋剣術、おけず洋人
剣の批評も載り、かく文化祭出席：松
あす



○京都鳩之手銀は支店復興、三井也
かく投宿客減少を為す事あれば
○右ある内状の上級の銀は創(米)
時代のスクチア、今後の復興は
全バラツク時代と銀を同様の
感あり、物ノ子の銀もとえり室
宮の意の黒いシミ、ある事や
もの、銀味もあれバと、更に内
めおく

十二月四日

○文化志祥化翁の餘興にと終るの展覧を企て
が良秀の面倒を感し、阿寺泥之助に聞き、紀念的

十二月

ハ移へたまひ丈八方々の保函で此をもとあるが、
ゆ政と莫てからぬ物ハ御より山川のことをあるを、却
つて何物が應急用ともまた、選擇が一寸出来
かねず、勿論固ひの部類へいくむちあるが、應急に
より、元々地味うよの觀客の注目を惹きし難
い、國も邦歴として、絵画の欣うるよ限るが、元
ハ刻々とゆき、主体の物語をおもいろいよが不思
考：無ふあるが、大きい物へ足掛：而側があり、や當
不けんばうんが、さんこれを絵う多く無ひ、なんを
じ極り可う、傍り隼の方は骨が折れひ、保し隊
列の拂ふが如きよ狭隘ひあるのと、僅うん哉興あ
りの本窟にえち丈の事いあるから、枯一杯の

背か折り重ねる。即ちまたく過るる。す時、雨
例りさざるが、よいか減へれば、まと集まつてよ
ハ物、漁獲船等、言甚類や大きき圓をも
あひ事もあつて、常玉毛とて、額、ブチ、ヒメモモ
ヨシタリヤウトどうやら片かついて、又薄す。
そつと盛観じ、一日の收穫とて、已ひのと増
い感、いかんと云はば、彼の都をもむか、衆とえ
やうことが出来、其のハ造成ひて、陳列を指
圖して、其家をも侈り、富貴、往々のよき
内や、興味のあるものと奉げて、見え左の如く
である。

十一月六日記

十二行

一航行丸遺物

志賀重良

也にスミ名ダーランの探検船、ローラン船
後、章印とえと羅磨のキニコロシ、
ヨシハ航行器と改称す、ニルハ其遺
物、之頃、其堅硬の木質重装而
黄とも云へき、フヨウク也、而ニ烏羽具
油、漆も原體の形を描きあり、左也
ニ洋漆也、右も漆也、而ニ东也、左ハ
即、右也北船に乗つて、你因も
署名す。

一佐久間島山石持の測量

三毛東洋

博中用の測量を省りし。木挽川下
簡便と波のうち風生も毒色附
ち

一 医科器械

近頃あるの使用に宇外科用器
えも三宅東出陳也

一 視対等象儀

估田从石の尼山の天体と為被
仕物とも運動する工風毛西洋と
端頭セモ一往のもの也

一 汽車

二つ

此に鉄道家の新形車と何れも模型
シ由来詳からずとあるが汽船に屬
するものと見ん。汽車の模型は自
然考集に取めり。其の解説を
又バ自ら磨かぬさん

一 ラフカデラ、ハルン造器航行

市用の帽子ナタ豆式烟袋及種等
時代の紀念物とし、之に附属した瀬
名據當時の圖也出名す

一 錢通五毛五十年代卷章

日本石油会社の釜ヒ挽糸棒

同社がラジオ製石油セシ制始
時代の紀念物とし、之に附属した瀬

レールの型に当りて終点より三尺五寸有

ミ刻字より外にレールの切削用二個

一 市面支法に合章

大段家所用銅素と附帶して運び

接道の式紙す

一 各種大砲模型

金屬製も各太さ二寸許のもの也

- 一 台車川奉手寄付
- 一 前後輪子手筋郵便條例
- 一 脚踏車無板車の法(自転車)
- 一 宇田川甚兵衛蘭文書
- 一 レーポルト手書(手稿)

用事の御用を珍り

一 ヘボン自走車の運行

由汝多院の参り

ケキベルの原行

フアウストと酒の時安眠を禁

一 ほどの外に一往々

一 摩太福寺書

由汝多院

由汝多院の出版傳播のヨル
の日本達と之達の出版式おもて
比人人力車とスルーピン人多

一 聖書

口上花

天保十九年二月ガホールニ格シ博士ガツ

十二行

コラ日本の難破船人の神助と得レ日
本達と之達の神助と聖母と御
神崎と御崎と御

一 胡無血利佐無の略

帰崎信亮

コムキリサムは、痛悔懺悔の意多々而
ニ年出版するも蔓也出版に甚き少
が故に面目失しおかず

一 聖母日課

口上

貞治四年刊カ本 廣武おもて
えと蔓の出版とづきどりる甚
き多々二月二三の聖母の日を以
てえまけり

一 沖芝田の佈作油練の總合
二 木賜蘇の圓形のものと紙後直毫を
三 油練の圓形の隊中の圓一場と漆
山漆の家の毛筆也

一 コンドルの壹書

市大に蓬萊の風景とし世人の設計
圖や連華模型多く出海え
早大國を破る地人が日本の文化を
八種謂して福至を薦す松十冊
の大部也

一大隈家と山居文古

大隈も又人を余が苦心章子圖

書館に移り、ひそか文書十枚並の内、
いろこのものありて、自生海でもよりと
印刷局送船局精良發送を極て済軍
送船所（あの）京瀬城を已て橋梁を
日本級の等の設計図を、ライマンの
測量圖を、と自役主様のもの
なり

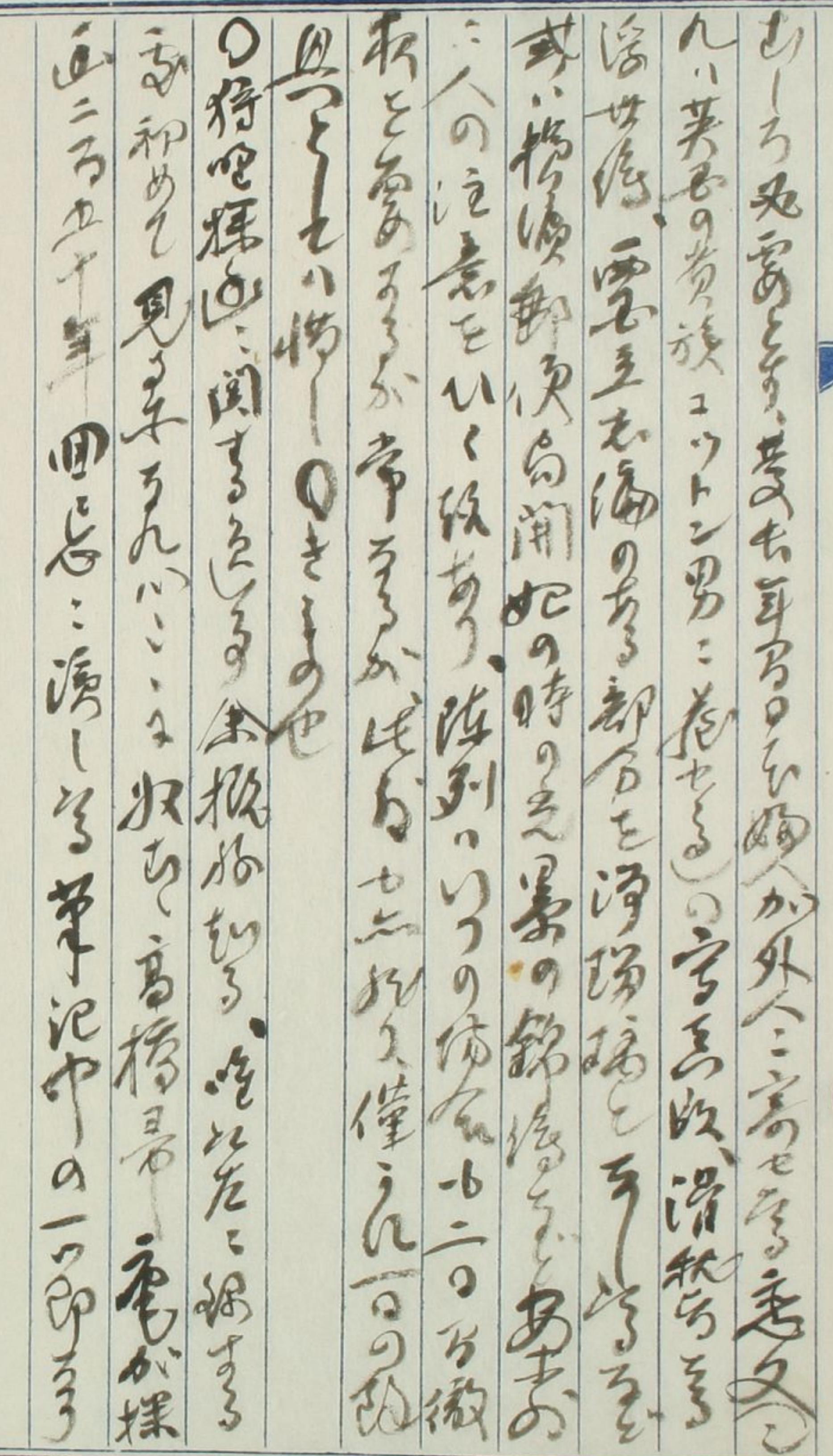
平大國を移り、日本と關係を外人の茅渟を度
る冊子を改列場を以りて、各所を外人の字と
ひき、生産を、本觀為に、事務所とあると見え、大
いにうれしい。しかし、さうしてどうに生キルをものと
此城の陣列を可免一べき人の活潑をいく上に於

谷村肩衝とゆき十幅

あるが、谷村肩衝の茶入がありました。探幽は用人に命じて家も頑焼しましたが、この時に、今は松平直亮子の所蔵で跡の中からその肩衝を拾ひ上げて、京都所司代の牧野佐渡守の死を痛んで茫然失しました。すると或る日京都の飛脚が、焼けた中納められてあるものは、火災などの時でも、その外箱はの手許に届け出でた。茶入などと云ふものは一重箱三重箱の時にもさう云ふ例があります。そこで牧野佐渡守は、これで居たのである。この事有つて七年後寛文三年に、探幽が禁裡御用の襖を描くべく京都に来た時、探幽が牧野に招ばれて先年のあの肩衝は何うしたかと問はれた。すると探幽は何と憐れな。牧野は谷村肩衝を取り出して見せたら、探幽は打驚をしなければならぬと云ふことになつて、牧野は富士山の十幅對を註文した。流石の探幽もこれには餘程困り果てたと見え、死んだと思つた我子に出会つたやうに喜んで、何か御禮をされぬ事は無からう」と云はれて承諾して、非常な苦心をして描き上げた。この十幅對は幸ひに、大坂の平尾皆夫氏の家に遷つて居りますが、業平の東下りとか、俵藤太とか、さらぬ傑作であります。

(日本美術協会探幽二百五十年回忌記念展覽會講演概要)

云ふ富士に因んだ故事を描いて十幅にしわもので、得易からぬ事は無からう」と云はれる御身が描えて、一應は断つたが、牧野に「名人とも云はれる御身が描かれて、云ふ富士に因んだ故事を描いて十幅にしわもので、得易からぬ傑作であります。



十一月吉日列之とく國者とあらう得るを左の
也

一山家雅堂印文

上下三冊と別冊本

易經考叢 四冊 印記有

乾隆廿九年革卒柳山海の印
説文、印釋考、玉北印譜載載也
ふを以て之舊もとを破りしよえら
坊主、聖ひ和、をりがゆき見しんあまの
刻おせしろくとす、印のを偽へること
ざまふか而、將ひ入る。

一修博野辭談

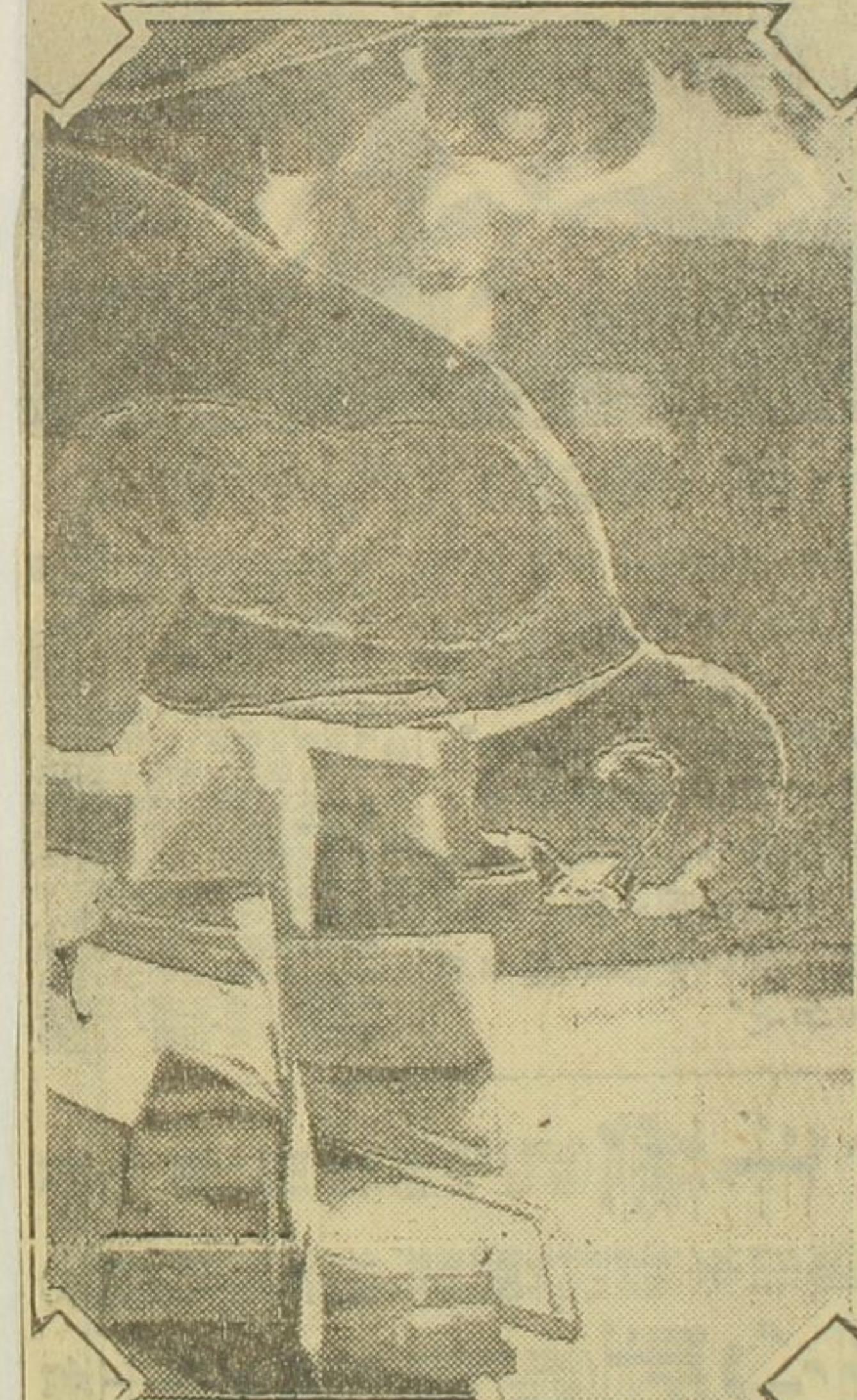
四冊

ハヌモ瓦自矣高さ中、あるのもの也
博古くは此ち四、卷を缺く化の補充
を約す。れを形をも巻を尾。二、四冊四
年。・役元大政心首修明者所角升
石大丸。こぢりを往來京都ハヌモ瓦
方主を主事ム。後本筋毛利私方、意
求極也。云々とぞ、此ちの大政に徳川
後の刷行とひえ多、即ちあと摺りと
見る。・し、梅野次郎城野解説ハヌモ
瓦主を御用の御印の事也。徳川の毫
也。修野酒、ある人の人の仕事もあらじ
修野、後世或の解し難也かえり

卷之三

三

ええ道主ハ腋中トのもの莫ニ而ニモ有ル
流ニ開ミテ之ニテ元也、秀吉本ト云ひ也
故ニテ凡多ホの上ニ有リケン者有ル特ニ妙
ヒテ危カシカガルト



明治文化發祥
記念式

昨日大阪會
館で盛大に

明治文化に貢獻した外人四百餘人を記念する明治文化發祥記念式は七日午後二時から早稻田大隈會館に開かれた、早大音樂部の奏樂後先づ大隈會長はこの事業を起すに至つた徑路に就て述ぶる所あり、續いて志賀重昂氏は明治の文明に就き英語演説を爲し、加藤首相の祝辭(代讀)あり、夫れより石黒忠惠男は老體を壇上に運んで、男が若い頃の對外交涉の挿話を語り外交團の代表として英國大使ニリオット氏の祝辭があつた尙當日來會者に手渡した明治文化發祥記念誌は多くの文獻の焼失した今日取締められた極めて苦心の編著にして一同の好評唱々であつた(寫眞向つて左から佛國大使クローデル氏、幣原外相、米國大使バンクロフト氏、立てるは大隈侯)



明治文化發祥 記念式

昨日大隈會
館で盛大に

明治文化に貢獻した外人四百餘人を記念する明治文化發祥記念式は七日午後二時から早稻田大隈會館に開かれた、早大音楽部の奏樂後先づ大隈會長はこの事業を起すに至つた徑路に就て述ぶる所あり、續いて志賀重昂氏は明治の文明に就き英語演説を爲し、加藤首相の祝辭(代讀)あり、夫れより石黒忠惠男は老體を壇上に運んで、男が若い頃の對外交涉の挿話を語り外交團の代表として英國大使ニリオット氏の祝辭があつた尙當日來會者に手渡した明治文化發祥記念誌は多くの文獻の焼失した今日取締められた極めて苦心の編著として一同の好評囃々であつた(寫眞向つて左から佛國大使クローデル氏、幣原外相、米國大使バンクロフト氏、立てるは大隈佐)

○十二月七日ハ明治文化講習會に念念をひらく。而
日主生憎朝未雪あり午後少し時れども豪
氣の満場となり、幸く内外の賓客の一時多く
大限令假の席を設けえり。三人と注せまし。此
の賓客のうち外國大使は室より内閣より、外務大臣が
大便赤と大使格の人形坐席を取るを得ず、幸い時れ
大限多の銀盤を床に置き、階梯の上の御用書類を
玉寶と氣を飾り、由利公四の筆にて五音律樂曲
の額を掲げ、世界圖を床に掲げ、式の奏樂
ニ次いで開始し、御食事の豆子進行、合本の模擬演説
に次ぐる志賀重昂ハ本会顧問の資格を以て英語
演説をす。加藤首肯の後辭代讀。ニ次ぐる不審

忠島チの追憶話(主として新)あり、在りづけ吸英
國大使入らずあり記つて冬木と代表する満洲事、高
後、幣原外相の吳稚暉役うる式を開つて同一
時間経、ある武蔵に満洲するとき満洲金子子が爲
の為り出席し得てさしり當体スリテ鶴之
外の外おの満洲役うる者も理の会せ坐乗し、
此日臨場の外客は何よりたゞ名湯商うる北辰深
ノ湯主とす。大限大戻立世をふと坐り、
喜ばれしきもと坐りて余りて追憶の酒を酌
セトモのうぶ實て文政御も創立以来の主義を西
際上の大會とも、之と偕まゐる二十九年以上の努力
を稿を寫へあり配布するに終り御みと外人の多

改を載せばかわらず、此の外への改へ四番に上り
の車駕を御乗るもゆかく、多量を積み、全体
此令を思ひ立ち下りの零散、大限を含
未だ亮後初めに御服良馬を一馬さし、既に、志望參
主喝一聲、うれ瑞祐とす、尚且外人御乗
力を以てある内大零散、多形而文化を燐國
帰し、今を以て、金をして一馬北修を含むといふ
の意義あることに想國別せしめ、さてハ宣明
するこそ、もう多く、此令の後も、資金を投
げたる者から、人を多く、又額三百
ニ至し、陳列の馬四ヶ所、海渡の後、將に祀
会場に進陳設をするも、多くの人々と燃へ

一より、余は無事北令を済す。一月二日初め、双馬
の軽きと見えり、余を取つて、左角打シテ、右於シテ、左
更位の重タメもよせ葉シテ也。十二月九日記
○文化祭念會、海渡にて、多量の出席を有し、幕
演後、会場於席に於て、一時乃飯酒、話、交わ、後
あくし、アキラ酒話す一二を報す。

高麗も英セト姓、後裔焉、長英、歎を脱
て、隱匿中、及御一聲、之より内に三兵タリナツ
リス、あり、北ち、ある御前、而、御、うらが、伊
東玄朴、えと、足、古、英、そも、此御、を、為
李のチ、か延び、りと、う、うち、軍、都、大

付中材ヲ附の若ちの三兵タクチウリの由ニ此
の詳見あらず勝取まとのふ

板垣攻牛に至難之降後事の名を有ニれ
りて高波長之ある所を御事と従うるより
みむすの認すと要へるが後事の内幕
吾の上活よりかずの認のを得ずし
改め年く承きなり、あるを以テ板垣を
以テ叛逆の徒とす、萬難の時、改め
み麗の別に追舞すも、もて、之に位す。
元は後事が板垣を以廢すに當る者
う勅使差遣の宣報御座くある
とぞ板垣くヤ利達一ノリ、ニえも維新

のゆゑに移し際のゆゑに出てしことし
せとくもあれどもちるが、御座も之れと支レ
前も得一方もすが今更のことと板垣の舊
難を今眼視一揆の手足に心つき家
にむすび下すも役人板垣と附つます
ことよりが板垣の其の軒並み見
動を不快に感一唱して黙けどか、唯に
陛下とも勅使差遣の意命に當りて感
聞して無言為淚行多か深く此の特
徴に及受けり、板垣の胸圍こ有る自内
宣の西々ハ勅使下降を謝免す一
毛、えどものもあく一ノカツムア、あるの

皆ハ今より想像し難き程のもの有り、後無
若石居にゆき着後、すまひぬむすら娘
の病を見、此等是も既頼まん以て、内
心えもろゝて引きよ高セ、自今之無別往
診を詮る。そのうそんにじもろゝハ、願と辭
せん。受怪を獨り、招きをあてて行きて
るが、ああこねあーんの事ハ、勅使の役
立下りるゝと、夫々やややをせんかん
為の事、やうやく宣るゝことを少くや、彼
の顔は驚愕恐怖の状を呈し、後恐
ニ別に該うことは無り、とのれ、や時枝
坂を逆賊と思ひ北上、友僚が勅使下峰

とめに意あて廻りやとぞもを得て、ア

○昨日又同方と通う差干を獲得

十二月十日記

印文輯略

二卷 合一冊

嘉慶年間刊 山東南劉紹藜玉田編
印譜にあらず篆家家の參考となるべ
き百項を輯め、家體異同、檢篆歌
詠、印人姓氏、漢隸篆異歌等を多く
版式精良印書の向北古蘭可ら
す

琉球國志略

六冊

支那版を覆刻し官版の一
琉球國志書今日北古

十二行

平和に必至る事、而して今極めて渴
易かとす、由山信録は往て五
六年、元より今ハ便ちし、北の
價の値代稱に徳す

鑒定醫記

一冊

漢方醫家の技術西醫の及ぶ所に
あらず、古例を奉け一般に西醫ニ
心附すりとることを謂ふ。レボ
ルトの後一渴さる病學を改めシテ
其他を舉く、若者ハ浅い宣傳也

自叙千字文

一冊

中村敬宇翁自叙のほ應を千字

又り体に擬しし氣づらひ、此又散

守の文稿に存するやうや單行本
も往來の行すり、ぬ此丁亥二月刊
行法家を也表紙に考究自筆も之

考究謹呈の四字も一あまも隠し

楊庵雜錄

庚午四冊

格め珍とよきもあらざれども書
つて青柳文庫の手に觸るは勿
也各巻の首部にち柳館文庫の
印記ある外、仙臺先生こ獻へる
印と他に圓古玉玲瓈とよき心
得を刻りし印を捺す、印の大

十二行

詠体書

楷云

勿折角刃卷

腦勿以墨

勿折角刃卷

脑勿全鼠

勿唾幅揭

市井臣文
藏紙

仙臺府君

ち柳文苑うち二葉巻を差し蒙て
の間更に候し後即ちも度々献へ
若れのよき也恵や遺文の如く
ち柳文庫の記す

日本詩吟集

一冊

明治廿七年共立高社の刊する所、日本の
吟詩の銘々附手書きを彌め一室のり
スルと定めんと音譜を西洋で倣ひて
心りどもの也著者ハ尾崎大輔なり
卷首ニ元良房次印の序す、今比
古を知る所稀。

新脩本草

十一冊

本艸の最も古きもの早く支那に送し
いと戎邦ニ零本卷子若干枚ま所
謂の新脩本草を唐高宗顯慶四年
年神農本草に注釋を附し二十
卷と一新脩本草と合してあるこれ

十二行

也日本ニ此ちの傳へる詳ハ天平三年使臣
支那に入り言未だらぬす。天平三年
顯慶四年の相距は七十年、此の異
言本が唐の影響の面白をあます
や難う。此ち往々日本ニ奉る波人
雲龍、波ノ日本ニ於レ西後刊セリ。余
の得タハ日本紙刷モ殊ニ珍ヒトマニ
足コ(便三千)此ちの多忙の精神古迹ニ
幸う。原本所人雲龍に持去る。此雲
日本ニ於レ政局の要あヒトマニ
の無くの因也過てあが降つて風が吹て北の日課
丈ハ欠いたことが無い隨分勉めたるが、北の因也

リハ自分の取扱から来ておこうがから松あつと金
一まい枚うようであるが、半町圓の邊を各所を因り
ヤードキ入るに若干の本を抱き、夜の人のじえの電
車に抱き、ゆつて来る時より、自人の蒐も
の者と思はる。じもう、母と圓を抱めるよ。居
まつて商人の持う来るト待つて買ふ積み一階級があ
る、こん々多く金持し、大金を投じ得難いあとさへ
あんば海でキミに入る族だ、やむ云村をひく北級、
危しげモー一つハ才業の族だ、株券ひく男アヤ
ヒ初めからある日、白い買入のり、至る時、備
けの不心があつて過るのをある。此連中一本もあく執
味うと将来懐の生る極み本を抱かず為り、努力

するがある。方々因レジハ圓約ハキ三種の趣味方位じ
過るのと全く違じぬる。北のホニ種は扇もあひ而白
味を國へまい。あひ男へもひのく、徒も多く貪
うひも多く、利がおいからといひて取扱に投じるいのを
買立くことひよ。ことせぬ、陪合不廉の便と計せば、
買立ることもあり、他人が毎年も顧みる。やうものと
ひ上けて採用する。ことあく自分もひ北キ三種
ニ属す。但ひあくから、との本ひ一つく理窟がある
事ふのがち、若の方は軍械じぞく附合頗頗であ
つて取扱士おあこねまさんえ資金が充分ひうの時、
動かさん後拂とくことをあく北ドに於シハキ三種
と頃の其趣を異れり。またあくさん時も未だ

又身を讀む雖全解、其處の事却かへ後も
身と見へつゝもの、サワト解説とほーして置く。日
本を心にことの言ふまひむるハ故を心にこしもす
題圖を瑞りしも多き、被換年と異なりつゝ有、卷
丁と神官と名々本の稿えよ力め以テ、千数のかう
ニト一トあらずむいか、さう云ひ人か取て置きか市
候ニ考へものとうつて現ひし時のみをもと此
中三種に屬する集が、何、七特別の用物を穿セ
ラものと見る、往々く持候す供的、一點床に捌キ一モ
さうりみじる者の思意や苦心を忍いやすよ多ヒ無
冷の水の如き亦ゆこねしハ無記の事と云ふ事
其の外は通の開閉取味家多く人の如く

貴しかつてゐるゝとおもひ、遅く過つて時を失へて、余
はすこ處で飲食をする事もあり、主ふおのほ幸を、時々
のあらばひのゆり太白を見るけれども、自然によく此
等の用ひの便に附かゞむべき、あにが、お尋ねひきいき
中三宿の貿易集落のやうとえんふことを度あるの措
くけれども、中三宿のほどより之を考是するか本高
びあらう、穴三角一見像立つる花の家の集書に
あやし放逐を拂ふことなくまことにあらばう。

○支那人殊々漢人ハ帰人の腋の窩の毛を見ると春竹
を想起し、動じまくる。肉うす、抑ゆる筋のすり、帰人を抱擁
すること、乱世ありと云ふ人、胸窩ハ人の胸を

十一月十四日

又難い怖いあるが、日本婦人の習慣と一も々々ハ脣
窓と擦ることをな、あり往來の婦人ハ筒袖の姿
とのと着ますますあれど、え未日モ婦人ハ比較的皮
膚をあらはしまを意とてろい、生シテ電車るど
乗つて吊り皮口と握りテは客の前に立つ時トキ
多數の脣窓事案そつれ禍とれし者とくとも有
官カリハ危険の時ひあつて、多數の婦人ハウツカリ
目脣窓ニ氣きひけずおる為シテ空客と觀
けば往々あつて見ゆる、漢人よりうへから危険
が無い換えよ、春防誘起の原を為すものべば防不
であります、え東脣窓ハ東京事務所附耳摩サ陰ん等もあらず
リ窓みる所であります皮膚の端を破りとするや

所であります、もの生え石の所でありますから、陰部にれ
似歎ががるときの、かく見ても陰部の肌相と通
き達する事の多く設全ひんが春防誘起の直因と
さうするのうも、問答の因とすむ件ハ、陰部と聯想
セアある人らわあえ過例陰もの隠密ニ脣窓のもの
始りよ依り判する程え、脣窓ニもの多きもの、陰部
七八とす多毛多毛推測かつくりひえれも春防誘起の
因目とすすよれあり且つ脣窓の毛ハ陰毛と全く
其質と固くまが故ニ一脣脣誘起をれすことを
シ、若き婦人殊ニ脣窓ニ多毛と有す婦人ハ注意
セても可れ、渠等ハ此のゆそが性並て無交渉と
かかれて注意を拂へざる也

○本のたの二書を購入す

十二月十一日

一忙海目録

一冊

久後六年内船者に現向に此物をめ
河田羅在勤時代に徳高の事の卷
考用と印刷にて洋紙の上に書
えある。此物の用二千四百部を取る
と長脱漏多きと多きと云ふ。但し
此種の用意外に血まがひと笨重、備
ひもとも必要あり。其の徳高の故と云
て價値は高い。(十四日)

一沖縄集二冊

二冊

裏きり沖縄集初版と號す、初

十二行

篇ハ版式ヨリ一页一歌を取ふ、独立
篇有りし、ニハ篇ハ普通是也。日本
ノルカク、讀てんと、既に初版と云
すが、之れを今へて見うてしゆるや、此
也、朝保(江戸の輪)いふやうと、沖
縄の地位す。人々の和歌と號す、卷
首後不數多の爲すり、書尾、有
秋の跋あり、久後九年六月刻、写す。
作者有る九首歌千四百三十九首と取
あ

○加藤お^音又聞に來て桂の因を人里に入つる時の事
を詠す、曰く余の因を今まゝ今とぞ桂の鷺祐^{シテ}作

依る。余の桂が政黨改進を豫て之に因改を料記
し得ることより同の元めどと妻に心外も後藤新平
との提携のとてし而事かくす思ひ桂に向つて之を
言ひ列居あるの生まき性格をかかに寧ろ
自今の入らざることと云ふに桂へ後藤
ハ内実どうぞするも、内助も第ニ、うけよ
及へずとあつて強も入念と勧のとて教う疾死に
下るの意氣に感して入念と謹じてか宣も
桂の改ニ不況の病に罹り、三ヶ月後も桂
命と極まらずあり其のよきをも切らみたんば桂
死後の面倒も略々怠慢さんと云ふ所もさう一七
一旦乗り出で以上、飽もあらずと貰ひの覺悟

投げて、二ヶ月の後桂は御幼のことを責を易
くが、妻も間もなく後藤新平の功ひ未だ桂死
する上の内急を解散す、しこの論も、自
分の後藤を詫ひ、桂の死への陰に於て既に公
元の役をうしやせ、妻下士とおれの上を内志
令を組織してしまはずや、今、遂に入ひ解散を
設くに何うひと云ひしよ後藤は、序を示すこと
古無りしが、彼のへま猶うと曰ふと後、後
藤のみづからその流動化を図ることを取
替り、自身のことを解説を主張せしことと
云ふも、後藤は附文を定めることを主努
玉を自らと幼いも、解説論を喝ひしれ

君に百五十萬円の金の出来事かと聞かれて、自分は
家や土地を賣つて、更に金を貯め、家人もいたり
かかる。又十萬円の金がある。どうもかと聞かれて時段
えへ云ふと、えふとあるが、西友の店で収入出来る」と
いふが、あの男の実元は一例であるが、自命と性格
の企へうひのへ北一例ひつて、砂利と詰めて、土壌を泥
〇生後の文化経営資金式場を於石里子音の漫遊
ハ齧子小彦初社せ湖から傳うる。まんが跡を守
緯を走て、猪口系と多くうるを説いて、まじで流石
二七寿の齧子殊に其後20年間は、此つに石里子の娘
きく人び多けんが承認してゐる。ことひきから、娘の
有參は感し、身の耳と傳はば、自分の司令馬

の里幕、いろの古物が身も、集まらず席
を設置する。全部支えられること、出来た
つは幸ひ不花里子は、傍邊のものと並へて、これら
れれども、通路をここと見て、方々收めるのが
お子自身の筋がある。また、お汝は、従む所
合は、お立候ることを思ふと、自分公勝、す
べて印刷、四半世をう、代わるとお汝の
令をこころねて、至るところまで

○西洋式の裸体畫と陰部の毛を省略するが爲へて例とまつてゐる。ある者は未だ洋畫の實を有するに不以陰毛を書へきのを何故ナゼビアリ詳ゆ人ハナリラクであるが、日本人の極く婦人のも特にナリラクモモデルして書くのであるが、人と笑はせる謡であるが、藝術の理解の爲めのものにて不審のあるのを一毫無理へ思ひ、云ふまひもきく、陰毛の有無は觀點として冥國を祀させり、用意から未だのをある、陰毛ハ冥感を呈するれどもかく有力であることが知る、併し毛ハ藝術上画くこと一つのものとしてある、陰世陰の巧拙ハ毛書之利セモトモのより、頭袋ト陰毛ト同一トモであるが、されば初身のより書けういところもあら、又滿

筆之を巧みに能る者、雅と號す者、上手の能ひの擅あとさうてゐる、ものもあり、如何にも藝術上難んせども、譯ハ多くの毛が業せられてゐる、其の本ぐが鮮かに無ければならず、而随つて非常極度の纖細の業と云ふ、殊々陰毛ハタゞのチレがあり、先と対する性根を凝らし、若心を要す、見る間係から苛々の餘潤のハ腕たぬし春畫とから、殊々陰毛を寫す性根を凝らし、実例かナシムヨリ、余れいつとや婦人の全裸の絵とてに時れ陰部の毛が墨くと見えりを、あるソ蓄收が之を見てあるハ真の陰毛ハ吉いと云ひ、陰毛ハあんまり生すとあひ多いといふが、黒一色だけ毛ハあつた、かむ多毛日ひセ筋と獨立のものが群をもとと墨くえヘテ譯

どから、黒色の金持も坎ふこといは陰毛とハ直すに陰溝
と織物の筆を寫すより勿論である。油絵の裸体画ハ
此の面倒な筆者を省くこと止まることから、彼等の助が
る譯に、藝術の事ハ此位で止めし。陰毛と性慾の関
係を察して見るに、國の習俗や母乳より陰毛がひどく
性慾を誘ふ場合と不そぞるゆゑとかある。日本ハ
陰部と毛と缺くのをカワラケといひて其婦人を擴存す
が、陰部とものあらうと美を找するものゝ故也。
抜き去る習慣の所もある。支那の則天武后もさう
云ふ。古く宣う有無ハ知らきいか、個次あれどのを世貿
ル必矣。あらざれども、かう一通例を多く多く之の爲め

婦人ハ陰毛を見くるが善きいある。至りて見んが性慾を誘
起セーラムシよと云うもある。而も协会より陰溝らしも陰
毛が却つて性慾をそそぐる力有する。こまでのハ直感よ
りか聯想の方が却つて力強いことが理にてるからか
ある。陰毛ハ交接^{全體}、接係ハ互の陰溝の背景に遇互のは
と、陰溝^{全體}連想セーラムシの程近いものあり、
多くの傍々陰溝ハ敵へんし冗雜いものあるが、陰毛ハ
婦人の裸体が主とば直す現は事もあらず、不用意の物
合リ現は事もあらず、婦人公衆すらも現は事もあらず、陰溝
ハ奥深く潜んで居るが、俗に所謂の駄窓^{アラモード}と云ふ
と考へてゐる陰毛ハ、衣類を脱えハ直す見つける所な
あり、云々陰門の看板のこときよのむちも見えぬ性慾

をそよごに力あらず無理のうい、芳しの江戸の婦人ハ
入浴の時は陰毛をあらはすと敢て素面を、印つて乳
を両手で掩ふといふが、何人の意味から来るか知ら
まいか、わ駆る習便と云ふと得ぬ、芳しの混浴ハ今
のこども男女共室ハ異つてゐるうつにこども想ひ放ハ
るゝ如北冊の前も書いたとく、臍窓の毛をあら
はしてすと、男子は春ぬ起し帰人に危険がある住む
あるから、混浴物々陰毛と露出することを尚更危
険と謂へてしと得ぬ、陰毛も婦人も朝夕の濃疎の差
別がある、多毛の極端のとてと瞬下とも向邪道
華艶速きうて發生してゐる様子のがある、斯る婦人ハ
手足共ともかすりて男子らしく多毛であるのと常とす

又自分がある温泉旅館にて浴へ、備に時、男湯傍女の浴
物ハ異つてゐるが、双方を畫した板が稍々短かく、浴槽に
かづんでゐると女の浴槽のカマチ、腰をかけられるのが
陰毛をあらはしてゐるが私常々多毛ゆるゆる
うき、好奇心に駆えどんと女か其の顔が見えないと
思つてヤットの事ひ見るとえん年先いじ尼ひあら
のむニ度喫飲むいあつて、文稿を眺つて陰毛が延ひる
俗の如か、ナカカ又譯かてもあるまゝ、元角立き身ハ毒
くくつて興がさぬ、如比の男子ておもしろい事も骨筋を
感や一めの、ナカカこれこゑおのれ極ハ全毛不毛のあらが前スも
云つにれく邦俗えんを擴布しも多ぐり之れを好きぬせ子せ
不毛を以て恥辱タダである、全毛双肩をまくり被す習

横が婦人よりあつて面部に美を力す所以としてある此の
慣習から推すと不毛陰部の不毛を喜ぶべきであら
うに習俗のためあらわすあま、雪白の肌とある部分陰毛のあ
る毛を白砥の砥と見るべきであるが、あるべきである
のがあれとみて、それが却て不美とせ見え、白壁に蠍蛹
と微美ちえ、男子も之と並ひ婦人も亦薄うりレントル
ウの習慣のれうへ所で、重婦人の或は妻女が性
慾をそう圓俗があると曰く極れ、此の陰毛が因し動
きをうしてゐる、宣心こあへると女も全く着怪ねいあ
く、鶯も紅粉と粉の白面のじよそ持もせさし。指
の持主であるが、衣類を捲つて見ぬば里々の
陰毛がある、あるのとえへあるのいある、併し楚々衣

ハ体の機会本歎の女子が、男を劫犯天を衝
ててお世うしけお陽拘と呼んでせず妻こむらを受け
入れることと考へると、あの聲びトグケ命とおや郎公
の歎血き能ひすじ、本筋の如く野獸のふかみがある、
陰毛の野獸性の表現であるひ陽るひあらう、陰毛と
せざしく生へて居るが、さう風にせむらうのか、妻の
ふ婦人の意外な陰毛の具へるが、例へば男子に言
ふとが陰毛と云ふに陰毛に満ちてゐるのである、妻エ
ニトラスとて目陰毛ハ一種の脣嚢を國セしめ、佛典
セテ云々、實を云ハ陰毛ハ一種の力である、佛典
から頬腮の毛と宿毛と云ふてゐる、又煩惱といふ

即ち力があり、煩惱が毛筋一本で一つ消え去るべ多
毛もと煩惱が多い譯り、言ひ換へんハ良え、大力が大る
譯りでもある、男の性慾を誘うるゝ力効のあるもの也
渦然ひき、

○此より専用本を過ぎ得る事無たの事

(十二月十九)

一 史記真本

二十一冊

此の萬葉の刊行、之未批あり。前日得
者古氏春秋と同式のも見え、此亦史記
の名文を薦めしと一部と見ず。迄手取
の内に加へし

一 長崎年表

一冊

丙戌廿一年とみ、全井俊行の海軍書
三條の上下二冊附録一冊あり。日進町
此段の時、ハ九月で令つて領布し、其の
後、長崎の史跡、又の東漸の事
實を知る極めて肝要のものである。

今ハ極めて稀もとす、珍本の部も
價十八圓也。此字數少て幼少者
をあうへすもの、前日晦いとる内務省
の印締目録の號も又曰候セ

一 壬戌始上戸 漢書

六冊

寶曆甲申漢下文書の若す不、大
はひ費坊方鳥記と云ふ各等を三隻
朴の傍ちく、み鳥記の如むたつきあ
歎め酒家の樂や、之を閑々旅ハ
す

一 音曲草から草 極本小 一冊

三絃の弓方を指南してある一種の

十二行

音書エタ一あり、此數のもの作も
あんじこんむる時代のものもあらず
ぬ書家の珍とする所也

一冊

正和年写浪花の雄川丘甫の著
すもうも主体焉の袋の紐を結ぶ
各体の式と因能しよよも岸
ひの一類ともよぐして、但し古い方
花の形に擬ふよき事、一行のや就
とて元のへき歎

一 永古圖書 徒文之部 一帖

高嶺千春ト稱する千石代列記ト

原書も：あらはす天保十二年刻す
所此ちあとすりえくさんも色お
もいろがくす、さんち原楊木也

一 中人木

原書改

三冊

中人木は茶の陰後まことひと
さうし縦一かのすとねふ、茶の刊
本うそひたるきもの内也

○後序：桂庵和専の刊行は大工あること書
て重慶あ澤あるすけり六丈の一本西村天内の
筆すこ花一あることも久しく知つ所をしや天
國生前遂に活字一筋す様らを湯さうば

天國歿るとすり吹複数をとめひ立す漸やく成
るとぞこ實を易くう、仍て大改の友人今井豊
と从へて未亡人、就て一本を滑初めことの而の
を窓よを得り、此の複数本の僅うん百部當
りうる余す得なれど五點、うるし活
ふことと躊躇して残本ハ絶、一そん、此の大工
ハ文の本とぞうひ伊紀地本とぞうひ又延徳本
とぞうひ天國のとぞうひ延徳本とぞうひ延徳四年
桂庵和専再刊す、ふのよや、えもと十年前
文の年い桂庵伊紀地本とぞうひ又延徳本
乱のあり、とい桂庵毎刊せよとの比延徳
本也、延徳のぬ應の前の年號とぞうひ北大工すのキ

三枚の行書の刻をもて嘆久と云ふ。桂庵ハ刻點と定めり。萬山の傳をもれ庵利上と云。刻本あり。余之をもれす。此の延徳本ハ桂庵自書と傳へ。刻點門あり。何故。此本代て傳らず。天四ノ之んを以て天に問。唯一本あると云と断る。書文は上大も大ゆる。書筋とす。八行本も模倣焉。正平改と匡郎略と因じ。卷尾。文は龍集章。夏六月左在衛つ村伊代和童貢金工鑄梓於薩州鹿兒島。とある。外延徳王子孟文。桂樹禪院再刊とす。桂樹次下樸糊なし。漢文難し。天因の縁起。從て尚ほ桂庵の生歴と薩摩の文多の事ハ後記す。即ち之んを察。

影印延徳本大學縁起

延徳本大學は桂菴禪師が今を去る四百三十三年前なる延徳四年（是歲改元明應）薩州鹿兒島に於て再板せ一者なり其の字

は禪師の真蹟に係り版式は宋の淳祐大字本に倣へり

桂菴名は玄樹周防山口の人にして六歳の時京都南禪寺の惟肖得嚴に師事せり。惟肖は岐陽方秀の弟子なるが岐陽始て朱子の四書集註に訓點を施し。惟肖を経て之を桂菴に傳へたり。桂菴深く之を尊信し。應仁元年入明して在留七年の間程朱の學を研究して歸朝。一乱を避けて九州に游ひ錫を肥後の隈府に留めて菊池氏の釋奠に參列せり。當時薩摩も兵乱打續きた。リーが太守圓室公（島津氏第十一世諱忠昌）學を好み禮を厚くし

て桂菴を聘せらる桂菴文明十年を以て薩に入り儒學を干戈騷擾の間に講し四年目の文明十三年には門人なる國老伊地知重貞に勧めて大學を上木せしめたりき文明龍集辛丑夏六月左衛門尉平氏伊地知重貞命工鏤梓於薩州鹿兒島の奥書あり世よ之を文明本大學とも伊地知本大學ともいふなり然るに此の板兵火よや焚けたりけん又も磨滅したるにや十年目の延徳再板とはなれり與書よ延徳壬子孟冬桂樹禪院再刊とあり桂樹禪院は桂菴の住せし寺なれば此の板桂菴の獨力よ成りしこと明なり是より先き朱子の四書は未だ梓に上り、ことあらす我國に於て四書の一なる大學を刊行せしは是書こそ其の嚆矢なりけれ

斯くて桂菴の學は盛に貴賤の間に行はる再傳の弟子日新公（島津相模守諱忠良）は其號を大學湯盤銘に取り其の儒佛を打ちて一丸と為したるいのは歌は薩藩士民の教典たり其の孫なる第十七代惟新公（諱義弘）も亦大學に出てし詩の語を取りて號と為し深く儒學を尊崇したまへり桂菴三傳の弟子なる文之和尚は公の侍讀にして四書に訓點を加へ後ち後水尾天皇の御前に進講しき其の高足如竹散人は初め藤堂高虎及び中山王世子の師と為り後に島津氏第十九代寛陽公（諱光久）に侍讀一門下に多く篤行の士を出せしが如竹寛永二年を以て文之點四書を刊行せしぞ四書集註上木の始なる是より以後四書海内に普及して士民の讀本と為り名教を尊ひ大義を明にして遂に明治中興の昌運を扶翼せり薩摩に於ける朱子

學は専ら實行を尚ひ四書の講義終る毎ふ師も弟子も日新公の「いよーへの道を聞いても唱へても我が行はせば甲斐ない」といふ御歌を打誦して巻を掩ふを常といたるは文之如竹以来の特色なるべし第二十五代榮翁公（諱重豪）に至り安永二年造士館を建て程朱學を以て宗と為し、より文教大に興り

人才輩出一て明治中興の元勲此の中より出てたり其の淵源を尋ねれば桂菴の首倡よりすんばあらず其の史實を徵する者は是書なり

是書を伊地知重貞の族孫なる伊地知潛隱先生の舊藏として其の孫女夫種子島君月川（虎之助時彦の再従兄）の所有と歸せず往々時彦に贈られしものなり文明本大學は疾く亡ひて傳

十二行

はらず延徳本大學も多年搜索一つれど是書の外に見所なし左れど是書は實に學界無二の寶なり萬一の事ありてを悔ゆとも及ばず因て壹百部を影印して永く其の真を天地の間より留め一は桂菴の大功を不朽と傳へ一は後人をして名教の重んすべきを知らしむと云ふ

大正十三年三月後學大隅西村時彦謹みて識す

舊考本の如く天因の漢文の版あり、大正のころ取らるゝ縁起と同一きを取て庚申北の縁起と詳かであるとのおり、後此卷昭と
置すところ
大正十三年十一月一日

馬鉢

壽山石似

朝鮮製の印

材トツタニキシ



柿瀬次金余の
扇めく心よ

前日山田正平

大正十三年十一月
昔記
此刻彷彿可と見る

大正十三年十一月

囁レテ因し印文を
閲防に取らしむ而
て余の主として渴す

十二行

の羅漢印譜無
前年秋月の木村竹香上様より所
多秋月種樹羅漢をもて山田寛山宮
を刻す一冊此家の印と詔と收め、山田正
子竹秀の子も其の家と嗣ぐ此印
再版を企て昨年一本を貰ひ来る。

柿瀬次金余の漢銅印と秋月印刻
力也四五の印譜を示す、次金余が有り、
支那人の印譜を以ての精到さと云ふ大抵
一印を二度乃至三度印矩を用いて捺ぎ而
して捺す毎に印面を拭ふ、然うされば印面
肥大と至る、用意誠に出来ても可らず、邦人

此用意と
ハ雨音印面を拭ひよれらもがれし
支分のせ印遇の責をすむ所事多寡すべし
○昨年未のひ房の産主附列のあり東美但乐郡
到りよひの酒入在本省と拂衣をうり、よ生訪向のむ
元の陳列すよに一々將か否ひのよあづむ、亦能ま
若ヒ也きぬを旅の紀、此用ハ物内をよ往來と
養き生を便みるをすと云ふて而も一ノ、前る唯
い得ども資財故の酒也詮水鳥鳥紀ハ便十音
うちが北海列之出でゆう田考よりニヤリハ内の西れ
つをあらはすを一都二天トシ、北の僅くえ得ども
左の如し

一往典故文

十一

十三行

通志中本多えり 政武在多う
川賊人
一 奈良土產 詞話判 三冊合一冊
古事記傳とて 律曲の文句と批評し比
るよもじ種人下
一 鹿鳴天
三冊

合冊三冊

合編
批評
三冊

鹿曉天
元年七

放三冊

三冊

琉球年代記
此卷今八稿
一冊存多入
爪哇寶文

一冊
二冊
三冊

各冊を合本也、而特其碑の跡を
読み乍り後へ至りて價あきら
かに購入

也ハ一々紹セテ

十二月廿日記

○本邦中野姫の市支那に係り彼ニ寄林曼陀羅像也
圓鏡の刻也、邦人之れと珍り之れを覆刺すもの
間稀んに流布す、余十枚前一冊を得、序言主附列
ミ又一本と高さ高さゆく、前も得らるゝものも此
も得らるゝもの、序跋せし事し、麻と元子は寛政已
未編刻となり又青裳堂発行とあり、邦人の序
跋もそのハ文化六年の覆刺に係り、尚版式と對

照考す、寛政の覆刺精工といひ、優うる所
多く和風北斎ニ二枚あることを知り得り、寛政度の
ハ唐紙摺りと文化度のハ和紙摺り、ち當者也若
羌其事とあり、或ハ板刷の版、若羌又あらま木
板、うち裳堂が持合印にて青裳堂より着
記あり、且とも記し難いと云ふ十二月廿日記
の所略い字詮の内トセ中華紋盡、つづ一書有
り、紋帳の一種と見る、相手をあわの板紙とも云ふ
者互に繕ひて了り、紋をあつめ、本書の刊年不
知りともえ縁の派手衣裳、脈を引き、紋の表
面と思ひ、一冊の内上半八枚ハ各頁六ツニ畫、一
大形に紋模を出す、此邦類之をスミベキ景不當

り。一二をうちハ松・木・筆とあくらむ白い鷺尾上の家を
あきらめ、寶船・碇を添へて湊の白家とあらわし、
波上に工船の船あり淡雅の二字を白ぬきつゝ。圓
扇に白文を載せ名花とあらひる。秋色の中で
白字や枕の字をあらはしり、薄きと圓形に描き馬
のアブミとらし名はる。小袖に秋色をあらひれ
る。稻穂は白ぬきの秋の字をちりつけてすらすら風吹
き、下半ハヤ・故を異シ一善色の役よりかき
あと韓の字とひびきり役をもよおし。上半に及
ばず、一時田代時代にさり役海のことをすり、但し
此の役盡しハえども時代古ふきより也。曰上役
○古代の歎歌の日本有ある時代より、其玉ぞ詩の在

本末江手入へ立ちしが竹の葉立・漸やく一云を詩
竹移入の事も本手もかたる事多處の書入本と若
校し、且つ書入を多くする事多くあるも、全本部
數々異ること得べし。

○張子祥の宋根國長日修物と高麗一未ほめ
あり、今持勧き賜の之型て揚げ側く花を多く

跡後こう

貌顯而醜、腹豁而空、蹲如席如豹
舞如蚪龍、下米頭拜、作蘋於昇岱

巍然一笏勢兀峯

先徳五年立秋後三日鶴齋七十七

丸人子祥張道家

匱に済人胡紙搗の跡寫（赤）某家も之復活
あり、子祥も疾氣利害著力衰くす、紙搗
言ふ事い如し。 青月廿一日記

○十一月廿三日坊間に得て雜書左の如し

一一本さへく

三冊

牛乳時代の折此亦古代故物の一
兎流三年出版よりをやのづやおひう
至り、傳写をもつ

一三而かくみ

一冊

延寶政四年切本 江戸京大坂の大安
を記す 植物多し 珍奇一書き書多き

一大般涅槃經疏

一冊

朝鮮全羅重慶天郡の古刹松廣寺に
此石を有す一〇〇年後賛府吉裕及の
之見て傷るよしと卷尾ニ沙門義天校
勘とす、此義天はも紀文宗の才子
にして大覺圓の弟子也。此僧の号號も
一時多くの佛也利也んじる事也。只今亡
びし無し北書僅うんぬすと称す
十立行本細字とも書極りて巻正宋
版の面目あり、高麗版の如ヒトモトおこし
本年六月朝鮮總督府印瑞福啟
ニ附しと表平都と號す、卷尾ニ解説

あつ文の南士池内宮の機の所也

一言心

一忙

見識に數多よまえよ忙に身もとあう保
有に便也

一各流古代大家心事言起し因

四十六役

參考の起し因へ古くからうそ、建築社
主を御法ハシムをす法書の附へあんば
ルこも構造へ得べし今も前年不持てし
が早く失ひソク、此頃は間に代入とす
前後ニ三篇とから二帳に替し今も
因す、常つも移せしもの因一とすや
否やと知らざんが、各流の某くふる事

玄機型四十行取めあり、最平松
送元に與一と手を交え、他の水の音
誰きの協同もとくに脇ひ入り、寅六
十四也、刊年あむまよ最直支珠坐
といふり出しげりよ

○複巻本と木葉樹不花馬琴筋本の金羅
柄（亦七集の本卷より九集一巻）とも刻本とも昭和七
年馬琴筋本の後元東京で執筆され、辰と印
し、圓柱と丸い形をもとめ、單大に花（ある）八犬
物久以後の柄本にはすんば遠うに廉価のとの
う生一子解説、左の如きを

新編金瓶梅草稿

廿四丁共

(原林若樹氏藏本)

本書は曲亭馬琴著作の合巻物中最も世に知られた『新編金瓶梅』十集四十冊のうち、第七集の七卷五丁と第九集の一卷五丁との草稿を玻璃版に附したるにて、原本其儘なり。この第七集の刊行本には序文に「天保十一年庚子春正月吉日、半瞎道人馬琴篇」とありて、草稿の脱稿は前年天保十年十月なり。當時既に右眼を失ひ専ら左眼のみによつて黑白を辨じ居たりしに、此頃また其左眼にも疾患を生じ漸く重きを加へけるを辛うじて執筆しつゝありし七十三歳の時の作なり。

第九集の刊行本には、序文に「天保十三年壬亥春正月吉日新板、盲文人馬琴自序」とありて、稿を脱せしは前年の十二年六月なること畫工への注文書にて明かなり。其頃は左眼を失ひて盲目となりて亡息琴嶺の婦たりし琴童に口授して綴らししものなり。刊本の口繪、挿畫は恰も豊國を襲名せんとしつゝありし國貞が筆なれば、ふと見れば、尋常の合巻とも觀過せらるべきれど、草稿の第七集と第九集とを對照するに至りては、作者が苦心の跡痛ましくも歴々たり。更にこれを刊本に比すれば悽然たらざるを得ざるものあり。馬琴が晩年の著作上の悲劇にして誰れか一掬の涙を濺がざらんや。

第一期刊行『里見八犬傳』第八輯の自筆稿本解説に

も詳叙しあげる如く、天保二年の稿本に於ても既に眼疾の痛み強く、挿畫の繪組圖は女婿柳川重信の手を煩したりしが、同四年には終に右眼を失ひたり、しかも猶孜々として筆を休ざりき。『金瓶梅』の第七集の稿を起す時の如き、左眼にもまた故障を生ぜしを尙忍びつゝ執筆し、挿畫も自から其下繪を描けり。されど天保十二年の第九集を綴る時は全くの盲者となり、口授して代筆せしめしは悲惨といふべし。卷末に添へたる畫工國貞への注文書の如き、殊に同情に堪へざるものあり。文字鮮明ならざれば左に原文を掲ぐ。

畫工様に口狀

一作者舊冬より老眼益衰當春より書候事も書き候事も少しも致難候間筆工は女わらべに代筆申付綴り立候得共畫わりは代筆致候者無之候間無是非人物の形斗さぐり書に致朱にて注文書を致させ置候間本文ともに御孰覽之上此人物にて宜敷御書き成可被下候校合も女童に讀せ耳にて校合致候間格別日間入申候跡二冊も稿本引續き出來致候間御くり合

成當年は書寫本早く御出來成可被下候彫はやすく上り候へば冬に至り校合の都合宜敷候間此段分て奉

賴候

八月八日

これに據りて、當時の戯作者が初春に賣出せし新合

正大正	大正大	正大正	大正大	正大正	大正大	正大正
正大正	大正大	正大正	大正大	正大正	大正大	正大正
正大正	大正大	正大正	大正大	正大正	大正大	正大正
正大正	大正大	正大正	大正大	正大正	大正大	正大正
正大正	大正大	正大正	大正大	正大正	大正大	正大正

主屋 信雄氏
吉野 京太氏
吉野 三樹雄氏

ON & CORRESPONDENCE. (元 .27) 4.30

DOCUMENTS. (元 .04)80

COMMERCIAL CORRESPONDENCE. (元 .27) 5.50

共著 N IN ENGLISH & JAPANESE. (元 .18) 1.40

アン著 MIDDLE SCHOOL. I—III (元 each .06) each .38

GIRLS & WOMEN. (元 .06)90

Text-Book of Spoken English to Vol. II. 1.50 Vol. III. 1.50 (元 each .08) 2.00

シソン編 Customs, Etiquettes (元 .08) 1.50

大 戸 神 版

正五年専門部政治經濟科得業
正九年一月二十五日逝去
正六年専門部法律科得業
正十二年十二月十三日逝去

息琴嶺の婦たりし琴童に口授して綴らししものなり。刊本の口繪、挿畫は恰も豊國を襲名せんとしつゝありし國貞が筆なれば、ふと見れば、尋常の合巻とも觀過せらるべけれど、草稿の第七集と第九集とを對照するに至りては、作者が苦心の跡痛ましくも歴々たり。更にこれを刊本に比すれば悽然たらざるを得ざるものあり。馬琴が晩年の著作上の悲劇に對して誰れか一掬の涙を濺がざらんや。

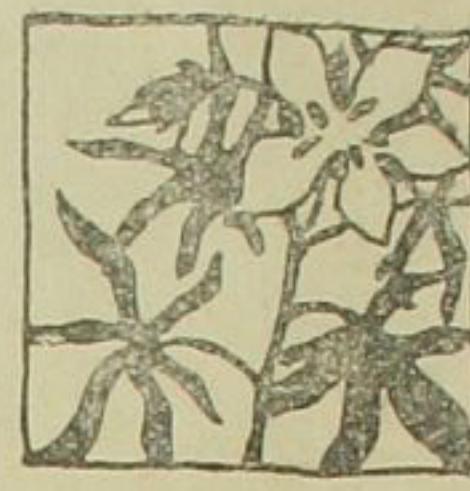
第一期刊行『里見八犬傳』第八輯の自筆稿本解説に

成當年は書寫本早く御出來可被下候彫はやく上り候へば冬に至り校合の都合宜敷候間此段分て奉
頼候

八月八日

これに據りて、當時の戯作者が初春に賣出せし新合

早稻田學報（大正十三年十二月）



人と趣味

川柳の趣味

教授岡田朝太郎

専門の攻學以外に於て、私の特に趣味を持つて居るのは海釣と川柳です、が、此度は釣の事は省いて、川柳の事のみを申しましやう。

私が初めて川柳を面白いものと感じたのは、小供のころ父から給入柳樽を見せられ、其説明を聞いたときです、後年に成つて氣が附いて見れば、給入本には餘り佳い句はありませんが、例へば「雷は鳴るときばかり様を附け」とか「福祿壽お辭儀のときはあとづさり」「霧を吹くやうに逃げた猫」「きりぐす脊中に膝を脊負つて」といふやうな句が、何だか子供心に面白く感ぜられたのです。

それから高等學校時代、及び大學の初期に、硯友社の一員として、少しく俳句を試みて見ましたが、何だか淋しく思はれ、深い趣味を引起すには至らないでしたが、其時分には給入本などでも、併風樹柳をボツ〜と買ひもし貸りもして読んで見ますと、常に人口に上る「居候三杯目にはソツと出し」だの「町内では知らぬは亭主ばかりなり」といふやうな低級なものばかりでなく、幽玄なもの、高尚なもの、深刻なもの、優美なもの、いかにも多種多様で、而も好い句の軽いヒュモアは、到底他の短詩には無いことが分るに至つて、段々と深入することにありました。

然るに其俳風柳樽は、別に初代川柳翁の撰に係る、前句附萬句合の抜粹に過ぎず、古句の全斑を窺ふには、どうしても其柳樽を取捨へる上に、底本たる前句附萬句合も蒐集せねばならぬと氣附きました、それから、句を作つたり、古句を研究した

りするよりも、むしろ材料蒐集に大に趣味を持ち出し、淺倉屋だの村幸だの、吉本屋を固より或は珍書交換會とか、藏書展覽會などへは、殆ど缺かすことなく、又専ら川柳本及び、他人の川柳本と交換する材料に成りさうな書畫ばかりを集めました、それで只今の處では、餘り口廣い言分かも知れませんが、川柳關係の書物は、日本廣しと雖も、決して私以上多く持つて居る人は無いと信じて居ます。

さて或る事物を研究するには、第一に材料が豊富でなければならぬことを、適切に體験しました、併風柳樽を百六十二編まで全部摘要し、且つ同一編でも異本のある分は、二重三重にも備へてあり、前句附萬句合は、其創刊の年は、寶曆七年とも云ひ八年とも云ひますが、私の所蔵では八年が一番古く、それより翁の歿せられた寛政二年の前年、寛政元年に至る三十三年間のもの、七分五厘ほどは集まりました、この方の蒐集には隨分苦心と費用とを拂つて居ます。

さて集めた材料に因つて、初めて發見しました事柄のうちの、重なる一ツ二ツを申すと、先づ柳樽に付ては板によつて、一冊のうち（通常四十二枚、後には不定）に、多きば十數句、少きは五句七句、異つたのが載せてある、例へば或る板の初編は「輕石も一つまぢつて義を立てる」といふのが、他の板のでは「枕繪を持つて火燒を追ひ出され」となつて居る、其理由が分らなかつたのです。

其後底本の萬句合を對比して見ると、柳樽の初編は明和二年に發行せられたのに、右の「輕石も一つまぢつて……」の句

は、それから二十年も後の天明何年かの句であることが分ります、それが動機と成つて、撰句全部の載つて居る萬句合の句の順序と、其抜粹で出来た柳樽の句の順序とを、一々比較して見た結果、果然それは寛政度の改革に因つて、最初刊行した柳樽の句のうちで、風俗其他の關係上不適當と認める句を削り、其跡へ他の編に有る差支なき句を挿入し、挿入用に一枚の句の全部又は大部分を、他へ轉載したのは、其一枚を削つてしまつたりしたのであることが明白になりました、それを初は落丁とばかり思つて居ましたが、落丁でなく削丁であつたのです。

初編から廿四編までのうちで、削除變換せられたのは、百六十餘句で、之を分類して見ますと、賭博に關するものが五十餘で、最多數、それに次ぐのが間男に關するもので、たしか四十餘句です、その外、罪刑に關するもの、猥褻なもの、大名役人や、天眞爛漫たる享樂主義の時代、惡く言へば、博奕、間男、女郎の誹謗に涉るものなどであります。そんなことは材料さへ集まれば、僅かの勞力で、誰でも見付け出すことは出来るのです。さうして、初期の川柳は世相を直寫したものとも云ひ得ますから、寶曆、明和、安永、天明、寛政の頃の江戸は、よく言へば天眞爛漫たる享樂主義の時代、惡く言へば、博奕、間男、女郎買など、放逸千萬であったことが推知せられます。寛政度の改革は、時弊を匡正する爲め真に必要であつたのです。

また約二十年來、句意の研究が次第／＼に盛になつて、從前何のことだかさつぱり分らなかつたのが、斯道の熱心家の説明で解し得たときの愉快は、到底筆や口では現はすことは出来ません。難句の正解又は正解らしく思はれる説明を得るに從つて多年之を書留めて置いたものに、初學の人には或は分かり兼ねるであらうと思はれる句の註釋を施したのを、五十音順に配列した字引を、人情俱樂部の正月號から、連載することになつて居ります、別に教科書式のものも公にしたいと思つて居ますが、何分にも餘暇が少いのに困つて居ます。

◎書考參及書科教語英善丸

新編金瓶梅草稿

廿四
共

原告對氏藏本

於ても既に

新編金瓶梅
七四一
本
著者標比號

三十一年一月二十七日逝去
成田元四郎氏
六年專治經濟科得業
三十一年十一月九日逝去
野田 貞氏
七年大學部法學科得業

二十三年一月六日逝去

七年專門部法律科得業	九年十二月十八日逝去	小松 辰治氏
九年大學部商科得業	十三年十一月六日逝去	勝野 秀信氏
九年專門部政治經濟科得業	十三年十月三十日逝去	山口 好則氏
十二年大學部法學科得業	十三年十一月十日逝去	辻 平三郎氏
十二年大學部文學科得業	十三年十一月十三日逝去	

四二

卷は、前年の春夏の候に多く筆を執りて畫工へ廻し、
畫工は其繪組に依りて描き、さて筆耕へ送り、畫と
文の淨書出來、やがて又著者の手に戻り、校合の上
彌師へ渡し、再び著者の校合を經て摺師の手へ渡る
といふ順序なりき。然れども製本出來を急ぐ結果、
著者の校合は一回にて済すがむしろ普通なりし如
し。それさへも兎角後れ勝ちになりて間際に打騒ぐ
さまなども、此口上書によりて窺知するを得べし。

川柳と風流撲亂と稱傳あつたのとそし、之あつて
例めりもとくといふやうもあつた。圖本の初版の者
き所以の一例ともいへば、差換を初段の後の筆に屬

のあはれて散東も身を包み立候りり拾丹かう
りの勢も底を賄ひ候が、元朝に此無一村のぬれ
辛卯春と寫りておひづい此後其事打消す矣などび

エフ・エツチ・リー著(新刊) My English Friend. Being an Explanation of English Manners and Customs Conversationally told.	(元 .08).....	1.00
増田藤之助著 THE INTERNATIONAL READERS. (元 each. .06)		
Vol. I. .85 Vol. II. .79 Vol. III. .99 Vol IV. 99 Vol. V. 1.15		
島々次郎編 STORIES FROM SEXTON BLAKE. (元 each. .06) I—IV.....each. 1.40		
同氏編 TWENTIETH CENTURY ENGLISH ESSAYISTS. (二十世紀論文集) (元 each. .08) I—IV.....each. 1.40		
アミシス著 STORIES FROM CUORE (元 .06)..... .50		
岡本清逸編輯 SELECTIONS FROM RUSKIN (元 each. .08) Vol. I. 1.30 Vol. II. 1.40		
村井知至編輯 THE THREE HOMES. (元 .08).....1.50		
丸善株式會社編 HELPS ESSAYS. (ヘルプス論文集) (元 .04)..... .50		
源馬治郎編(新刊) ENGLISH ROMANTIC POEMS. (浪漫的英詩集) (元 .08).....1.40		

通 橋 本 日 京 東

九善株式會社

ルビ丸・田三・田神・京東

複本より奉書掲の句帖があつたから、頃々敢て
難い得に、えりと甚村の自筆と刻にまじ複本
一式あり、原本の甚村の所うちのあひある、京都
の山源流が、或る奥の船工か印影を残す人に冊子
まわしてゆきと見て、既に印影をハガレしをもと、此の
刻本があらえんじかいで、船工の印影を捺つても
うぬが、後へて刻本かうのとそのむ北次出納し
れといふが、否あそをつくり其傳複本一してある
から極しい、表尾に詳細の解説が附してある
の和七年が甚村の歿年亨子を號ふて有り、えの
四年の春の帖があつたり。推定甚村の度ろめの
巻の出来事にあらへくあり。(十一月廿六日)

十二行



此印取却耕石ニ賜

一之心之所、文云

此方不換酒

余の花書印ニ

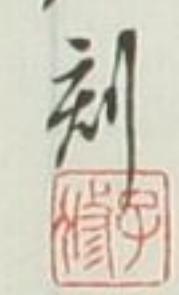
子孫換酒と可

の文を刻し、より
り不換酒の花書
記二種可矣。
奈川物家に此書不
換收の花書印

此印えんに倣ふ
十二月廿六日

耕石如是

甲子某候



圖覽室

十二行

